

紡
績

巻頭言

古西 和夫

山岳活動は、今から二十一年を経た。ワシントンと云つてからは六年を経た。そして現在
確かに活動は軌道に乗つてきてゐるやうに思ふ。しかし、何か欠けてゐるのでは
ないか。技術的水準が山岳部時代より低下した事を言つてゐるのではない。一年を
通しての、そして各代を通じての一貫した活動方針がない。行き当たりばつたりの
な山行が行なわれてゐる。私はそれ思ふのである。山岳部時代の活動方針は、
一つの活動方針を確立する、ということではなかつたか。いことである。いくら頑張つ
ても実現できないかも知れない。しかし我々の部はあくまでも運動部である。単に
るお樂しい的を場固定は一掃するすべからぬ。と私は思ふのである。

目 次

○	山行総覧	3
○	山行報告	5
	男子 1967年度	5
	夏山合宿	12
	春山合宿	16
	4月～1月山行	17
	1966年度	30
	春山合宿	34
	10月～2月山行	39
	女子 1967年度	45
	夏山合宿	49
	5月～2月山行	50
	男子個人山行	51
	南アルプス	51
○	最近感じた事	53
	古西和夫	55
○	山にア	56
	木俣 冊	60
○	無題	51
	在間直樹	51
○	過去二年間の思い出	53
	藤田明子	55
○	雑感	55
	目次民雄	56
○	部員名簿	60
○	西朋登高会会員名簿	60
○	編集後記	60

編集 — 古西 知夫
渡辺 喜仁

表紙 — 水口 泰介

66年度

山行総覧

山行名	月日	参加者	行程
男公 雲取山	9.30-10.2	2年4名 1年13名 O.B.1名	氷川-石尾根-雲取山 -三袋ノ湯-鴨沢
女公 雲取山	10.1-10.2	2年6名 1年5名 O.B.他2名	鴨沢-フナ坂-雲取山 -三袋ノ湯-御祭
男公 春山偵察	9.30-10.2	2年中尾・山本	八ヶ岳南部
男公 大菩薩嶺	10.16-10.17	2年八島 1年6名	柳沢峠-大菩薩嶺-牛ノ寝-倉沢
女公 高水三山	11.4	2年3名 1年2名	笠畑-高水三山-御岳駅
男公 西丹沢	11.19-11.20	2年6名 1年8名 O.B.1名	中川温泉-畦ヶ丸-初ノ入道山 -大室山-東野
合公 不十合宿	12.26-1.6	2年11名 1年10名 O.B.12名	苗場 和田小屋
男公 大菩薩峠	2.10-2.12	2年4名 1年10名 O.B.1名	磐石-大菩薩峠-小菅 -深山橋
女公 御前山	2.11	2年5名 1年3名 O.B.1名	小岩-湯久保尾根-山頂-小岩
女公 不十合宿	3.12-3.17	2年5名 1年3名 O.B.3名	八方尾根
男公 春山合宿	3.21-3.25	2年4名 1年7名 O.B.4名	赤岳 鉢泉定着 雪上訓練 硫黄岳・美濃戸中山 注復 赤岳アタック(失敗)

67年度

男公 御前山	4.1	2年古西 単独	栃寄-御前山-三頭山-神社
男公 ミッドック	4.3	2年 中村・伊東	日原-ミッドック-川苔山-氷川
男公 ミッドック	4.3	2年 水口・綱入	棒ノ嶺-ミッドック-日原
女公 三頭山	4.5	2年 藤田・山根・長島	小河内神社-三頭山-峰谷橋
男公 甲武相国境長根	4.5-4.6	2年 早瀬・渡辺	神社-三頭山-笹尾根-小峠高尾
合公 新入生歓迎会	4.23	3年12名 2年14名 1年17名 O.B.他11名	川苔橋-百尋ノ滝-塩地谷小屋 -川苔山-鳩ノ巣
男公 雪上訓練	5.2-5.3	2年10名 O.B.11名	土合-幽ノ沢-土合
男公 奥秩父	5.13-5.15	3年 八島・中尾	増富-金峯山-笠取山-落台
男公 御前山	5.20-5.21	3年3名 2年11名 1年11名 O.B.他2名	数馬-御前山-鋸尾根-氷川
女公 三頭山	6.4	現役10名 O.B.4名	小河内神社-三頭山-倉沢
女公 リバツブ山	6.17-6.18	3年2名 2年4名 1年1名 O.B.他3名	日原-ミッドック-リバツブ山 -踊平-古里

山
山
男
女
男
最
山
無
過

雑
部
西
編

二時起床。五時覚。今日は葉師岳へ登る日だ。きのうとは違って変って皆調子が良い。七時、幕営地の葉師岳に着く。軽食をとって、葉師岳へ。塩原をぬけ、雪渓をぬけ、ガラガラした登りを続ける。よほじ上まで行かないと頂上は見えない。いかにもどかい山だ。合宿第一番目のピークの感敷や何処に！天気は快晴。櫓が見える。立山が見える。正面に裏銀がその手前の赤牛が大きい。あす歩く核線も爐へ向って伸びて行く。頂上のすぐ下の雪渓で昼食をとる。今年は雪が多いらしい。雪のシャーベットを食べながら、裏銀のグナ立てのきびしい登りを考える。高山植物の説明を三年の八島さんかう受けながら調子良く下る。四時の天気図をとる。台風が心配だ。十時のもつてあすの行動を決める。あまり思わしくないので、予定の黒部五郎を越して三蓮まで行くことにする。

。二四日(↓黒部五郎)
二時半起床。五時覚。行動を考慮飯を炊いて持って行く。太郎山と上ノ岳の後は素晴らしい。雪と草原の中を行く。快晴である。長行履なので少しゆっくり

したセツキで着実に歩く。第一昼食中九時の天気図をとり、台風の心配がなくなつたので今日の幕営地は五郎のカールにする。喜び過ぎて地固を飛ばす者一名有り。岩がゴロゴロして登りにくい五郎の登りを、ガニガニ登る。肩にガックを置いて頂上へ。カールのテニスが小さく見える。箱庭の様だ。西側から少しがスが出て来た。急な下りをカールへ降りて行く。後には五郎の力強い岩はだが僕方を守ってくれるかの様に切り立っている。豊富な雪は我々ののを潤おし、かわいうしい高山植物は安らぎを与えてくれる。強く透明な白ざしを浴びて、大きな岩の上で寝ころぶ。登寝をしたい。最高の幕営地だ。あす合う裏銀隊の事を考える。がうまぶたを閉じる。

。二五日(↓三蓮↓双六池)
三時起床。五時覚。藪木と高山植物の中を黒部乗越へ行く。道がぬかっ、歩いて歩きにくい。黒部乗越にも幕営ができておらぬ。小屋の裏手から新道ができていた。新道を行く事にする。きつい登りだ。ぐんぐん登って直搦尾根に出る。旧道より少し早いようだが大差はないだろう。

顔は素晴らしい。雪と草履の中を歩く、
快晴である。長行艦なので少しゆっくりに

くムムと暑く、草履履物にどきどき、
少し早いようだが大差はないだろう。

五郎のカールの良く見える所で一休み。
きれいなカールだ。一気に三蓮へ。みん
なわくわくしている様だ。フアイトをか
けて登る。頂上だ。着いた。「俺達の方
が先だぞ！」。奇声を発する。裏銀隊は
まだだ。記念撮影をしていると八島さん
が登って来る。裏銀隊を先見。「おーい、
カンバレーノ！」「ヨーノ！、などの声か
れる。日に焼けた顔をしわだらけにして
笑う。うれしい。

裏銀隊

。七月二二日一↓濁沢出合
新宿発七時の急行で出発。早朝にもか
かわらず多数の見送りを受けて笑顔を見
せながら内心緊張して新宿をあとにし
た。天気は晴れ。卯の梶内さん、秋山サ
ムを言めて一行十二人は、午後一時、暑
い日射しの中を大河に降りた。大河
がバスで七倉へ。そのころか夕天気が
怪しくなり、時々パラッく中を歩き出
した。ニポツ千目雨が本格的に降り始め、
ホソキヲを着る。一同憂かない顔で四時
濁沢出合に到着。小窪のすぐ近くの道の
端に、三。月ヨリ晴天を期待

しながろ毛布にもぐる。

。二三日一↓鳥帽子岳
起床三時半。天気は快晴である。しか
しあまり暑いのも困る。六時出発。約四
十分で尾根に取り付く。取り付きで休
みを取り皆これか夕の長い登りを考える。
しかしこの尾根を登ってしまえば、六
時五十分、長谷川を先頭にゆっくりに登
り出す。皆、前の者の足を見ながろ登る。
展望はほとんどない。それでも時々、我
々が目指している後線がはるかに高い所
に見える。天気はあい変わらず快晴だ。三
ピツキと幸で三角点に着く。昼食。皆あ
まり口も利かずに黙々と食べる。ふと雪
渓でシャーマットを食べているおろろ葉
銜隊の連中が頭に浮かぶ。我々には水け貴
重である。十一時再び歩き出す。一ピツ
キ半でや々と後線に出た。眼前には想像
していた以上の莫大な自然があった。皆
の息が思わず声になる。そして何より
も我々を喜ばせた事は、残雪が豊富だ
た事である。ニセ鳥帽子を越えた時、思
いがけず朝日岳から縦走して来たれた。卯
の方四人に会った。一時半鳥帽子岩の下の
聖地に卯の人といっしょにテントを張る。

た。付近には残雪と池があり素晴らし
所だった。しばらく休んでから鳥帽子岩
へ出かけた。今合宿最初の一日だ。山
頂でしばらく遊んでから幕営地に戻った。
四時の気象通報で台風が接近している事
を知り、明日か今の日程が心配された。
しかし明日は後線歩きだ。

。二四日(↓水晶岳)

起床二時半。快晴である。五時出発。
朝日の中を歩く。右手の葉師は赤く
染まっている。三ツ岳の麓りで初めて櫛
が見えた。「遠い！」そう思った。し
かし非常に気持ちが良い。八時半、野口
五郎の手前の大きな雪田で一回目の昼食
を取る。雪は白い。空は青い。アルプス
の後線にいる事をしめしめと感じる。た
時の気象通報で台風の心配がなくなった
事を知りほっと一安心。野口五郎を過ぎ
て東沢乗越に下る。乗越は歩きにく
いがラグラの道を行き、赤い赤岳の斜面
を登る。思ったよりバテる。十二時半、
水晶小屋から下り、と下った所に幕営。
昨日かグ一緒だったBの人四人と別れた。
二回目の昼食を食べてから、空身で水晶
岳へ行く。水晶岳付近はかなり雪が残っ

ており水には不自由しなかった。夕方向
いの今日歩いて来た後線にガスがかかり
始めた頃、明日の葉師隊との状態を思
いながら一日を終えた。

。二五日(↓三俣蓮華岳↓双六池)

今日も快晴だ。皆元気である。ワリモ
と鷺羽の間の鞍部で最初の休みにする。
皆の話題は三俣蓮華にどうかが先に着く
かという事である。二十分の急登で鷺羽
の山頂に着き、そのまま眼下の三蓮の小
屋目指して下る。不安定な石ころの道を
下り、小屋の少し先の残雪のわきで休
にする。皆三蓮の頂上での出合いを思っ
て落ち着かない。ここまで来ればあと一
息だ。八時再び歩き出す。皆かなりバテ
たが声を出しながらかつ十分で山頂に着い
た。そこには葉師隊の連中のニヤニヤし
た顔が……。

曹田で昼食後双六へ向かって出発。御世
話になったBの秋山さん、梅原さんと別
れる。櫛の肩まで行くそうだが、ガスが出
て来た。手を連れ、雷鳥が千ヨコ千ヨコ
後援に出て来る。双六の山頂は平気で広
く少々まぎつく。ガスの時は要注意ノ

又二也の事だ。あまり快適とは言えない。帯だ。一ノ俣で一息入れて一路横尾へ向かう。

双六池の暮野地はあまり快適とは言えない。急に人数が増えて賑やかになった。

二六日(→横尾)

二時起床。五時発。今合宿最高峰へ行く日だ。これが本場の山場である。ここまで来ると槍が大きい。朝日を浴びながら槍へ槍へと向う。硫黄乗越へ来ると槍がのしかかかって来る様だ。西鎌へ入ると肩までは大した休みは取れないだろう。フアイドフアイド！全身をフアイドに燃やしてぶち当たる。岩のゴロゴロした道は、僕らのエネルギーを吸い取ってしまふ様だ。暑い！皆歯をくいしばって頑張る。ヤツとの事で肩に着く。カルピスを持って穂先へ向う。足脛は危うかしいが気持ちは軽い。ヤツヤツた！ここまで来たのだ。ふもとでは大きくて押しつぶされそうになった山々が目の下に見える。葉師、黒都五郎、三蓮、双六、裏銀の鷹羽、野口五郎、みんな見える。真白な雪をそつと抱いて、直着な空の中に立っているのだ。振り返ると穂高連峰だ。肩で昼食を取る。熱い長い下りの始まりだ。途中で残しておいた昼食を食う。双六が分横尾まで行く時は昼食を二つ用意した方がよい。一ノ俣付近まで来ると森林

帯だ。一ノ俣で一息入れて一踏横尾へ向かう。皆さほどバテがに調子良く着いた。この先奥した一日の終わりに横尾の夜は「しおの感懐」があつた。あすの北穂の事を考えながら眠りに着く。

二七日(北穂高往復)

今日は空身で北穂往復だ。炊事に時間がかかり予定より三十分近く遅れて出発。ここから今まで御世話になつた横尾さんと別れた。木立の間が分高の山々を見上げる道をニセツ千で潤沢着。素暗な暑い天気だ。残雪も非常に多い。涸沢をあとに北穂沢に到着して登り出す。木影がなく流石に暑い。ニセツ千で北穂の南峰と北峰の間のコルに着き、そこで二つに分かれて、一方は北峰の山頂へ。一方は北谷二尾根に入り、瀧谷の見物をした。まず山頂へ。合宿最後のゼークで歩いて来た道を振り返る。何とも言えない気分である。滝谷では同行して下さったOBの秋山さんに説明をしていただいた。ハンマーの首が響く岩壁が我々を感圧する。そして岩壁に比べてはるか小さいながら全身でそれを登る人間を見る。北穂のテント場へ下って昼食にする。ここが最後の残雪をかかっている。十二時下山を始め。涸沢で秋山さん、尾崎さんと分かれて横

横に戻った。いよいよ明日下山である。短
 がい合宿だった。明日の行程の長さを思いな
 がら合宿最後の夕食を食べた。

。二八日(徳本峠↓下山)
 食当制をやめて予定通り出発。今日も快
 晴だ。早いピツキで梅川の岸辺を歩き、徳
 本峠への道に入っている。とたん人気がなく
 なる。後線は見えないのだがなかなかに近
 ない。今までの疲れが出たか皆割合バテ
 九時十分峠に着いた。穂高の山々を胸に焼
 き着け峠を下る。谷底目がけてどんどん下
 る。しばらく行くと今はすっかりさびれて
 しまった。船留小屋に到着。昼食にする。十
 二時出発。ほぼ平らな道を一ピツキとす
 った。で出合に出る。ここがトランプ道
 だ。坦々とした道をどんどん歩く。人里は
 近い。あやと少しもある。照り返しの強い道を
 れば。あやと少しである。照り返しの強い道を
 皆がハバル。以外に長い。バスに乗った。纜
 老客が我々を見て過ぎて行く。三時五分、
 島々の駅に着いた。皆顔がほころぶ。あし
 しどの顔にも単なる喜び以上の何かがあ
 た。
 計画の段階かいろいろと御世話になっ
 た。おの方々、ありがとうございました。
 へ古西、水口記一

6:25
 8:25
 12:00
 13:35
 6:00
 7:35
 9:40
 11:45
 15:45
 20:30

(コ一ス夕イム)
 (一乗 師 隊)
 21日
 上野 19:30
 4:49 富山 5:43
 8:20 折立 9:32
 11:40 幕営地
 23日
 7:00 菜師峠 5:05
 10:00 菜師岳 8:30
 12:05 帰幕 11:00
 24日
 5:00
 中候乗越 8:45
 9:10 昼食 10:00
 11:40 黒部五郎岳 12:10
 12:40 幕営地
 25日

5:30
 6:20 黒部乗越 6:30
 8:35 三嶺華岳
 (裏 銀 隊)
 22日
 新宿 7:00
 14:00 七倉 14:20
 16:10 濁沢出合
 23日
 5:00
 10:25 三角点 11:05
 13:15 幕営地 14:20
 14:40 鳥帽子岳 15:10
 15:25 帰幕
 24日
 5:05
 8:40 昼食 9:30
 野口五郎岳 9:40
 12:30 水晶小屋 13:40(次ページへ)

裏 銀 隊
 小川 渡 近 藤 03木 1 梶 内 氏 秋 山 氏
 銀 隊 三 年 花 1 尾 早 内 氏 一 年 一 氏
 山 本 村 原 氏 尾 崎 氏
 中 梅 原 氏 尾 崎 氏
 三 年 一 年 一 年
 八 島 入 島 (L)
 一 年 一 年 一 年
 永 井 水 口 宮 崎 伊 東
 長 谷 木

装備一覧

幕管関係
天幕

No.13, 15, 17, 18
スコップ 2
ツェルト 1
グラウンドシート 1

石油関係

石油コニロ
大6 1ル2
石油 8ル
白血 6

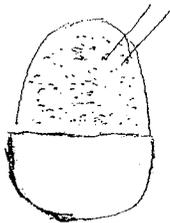
炊事関係
飯鍋

2
コップ 2
洗い鍋 2
その他炊事用具

その他

時計 2
ラジオ 2
修理具

(数字は、薬師
裏銀兩隊を台
わせたもの)



14:05 水晶岳	14:55	27日	6:25
15:25 帰幕		発	6:25
25日	5:30	8:10 淵沢	8:25
発		10:30 北穂高岳	12:00
鷹羽岳	6:50	13:20 淵沢	13:35
17:40 三連小屋	8:00	15:20 横尾	
8:40 三俣蓮華岳		28日	
(合流)		発	6:00
発	10:00	出合	7:35
12:05 双大池		9:10 徳本峠	9:40
26日		10:40 鱒留小屋	11:45
発	4:55	15:05 島々	15:45
硫黄東越	6:20	16:15 杉本	20:30
9:00 肩	9:10	29日	
9:25 槍ヶ岳	9:55	4:30 新宿	
10:25 肩	11:00		
12:00 鷹食	12:50		
14:55 横尾			

天
の
方
々
、
あ
り
が
と
う
ご
さ
い
ま
し
た
。
(古西 水口記)

夏山食糧報告			
	B	L	S
22	弁当	食パン	カレー
23	サツマ汁	カンパン	クリーム煮
24	炊込み御飯	フロッカー	ブタ汁
25	ミソ汁	カンパン	五目寿司
26	煮込みラーメン	フロッカー	トマトスープ
27	ポタージュ	カンパン	ハヤシライス
28	カツサ汁	カンパン	自由
T1	コンソメスープ	カンパン	おじや
T2	やきそば	カンパン	ミソ汁
	-11-		

(コ
(葉
4:49
8:20
11:40
7:00
10:00
12:05
9:10
11:40
12:40



春山については四月から、色
 々な事が言われてきたが、本
 格的に討議し始めたのは夏山が終
 わって一段落着いてからだった。
 まず問題になったのは、定着か
 極地法か、それとも縦走かとい
 う事だった。先年度の春山は定
 着だった。だが、天のため、当時一
 年だった。我々はほとんど何も
 きずに終わってしまった。充実に
 た合宿とは言えなかつた。そこ
 で技術的には定着、あるいは極
 地法程の事はできないが、比較
 的充実した山行ができるのでは
 ないか、という事で、縦走形式
 を採用する事になった。また縦
 走は過去に二度、それも十五年
 前か少し一度も行われていな
 いので、春山の新しい分野を開
 くためにも有意義な事に思われ
 た。が反面、三十kg程度の荷を
 背負っての行動や、一年の雪上
 訓練を行なっていない事を考え
 ると候補地は限られたものにな
 ってしまった。結局、技術的に
 困難な所が無く、ただラッセル

が問題である、金峰、甲武信の
 コースが来まったのは八月の末だ
 た。十一月、下山ルートの手渡尾
 根の偵察を二年水口以下二名と、
 甲武内氏で行ない、一月入道山で
 雪中幕営の訓練を行なった。そし
 て三月二十八日に、何が何でも甲武
 信まで行くぞ、と意欲満々新宿を
 出発したのである。

二八日 へ入山？大日小屋
 朝六時十五分の列車で新宿を出
 発。早朝にもかかわらず送りに来
 て下さった人々を見ると自然に気
 が張ってくる。列車が甲府盆地に
 近づくと、今までの山よりしてい
 た空が急に暗れて来た。そして車
 窓が急は目指す奥秩父や南アが白
 銀に輝いて、と書いたところ
 だが、少々かすんでいるためか、ほ
 んとろなりの白い物は何も見えな
 い。「さあ大変だ。もし雪がなか
 った分どうしよう。が、この心配も
 増嵩へ向うバスの中で白い山を見
 て解消された。十二時ごろよつとす
 ぎ増嵩を出発。八日分もの食糧を

持っているため平均して一人三十kgずつ、
 峰の山頂に着く。二二で夕食にする。救済
 になつてしまった荷は、登りにかかるのと、
 回復して十一時、甲武信に向かつてまた一歩
 を着け出す。あいかわりが、二二で夕食にする。救済



困難な所が無く、ただラッセルが増富を出発。八日分もの食糧を

待っているため平均して一人三十kgをよつとにたつてしまつた荷は、登りにかかると、とたんに利いてくる。金山部落を過ぎ金峰やミズガキが見えだす頃には、皆バテ始めた。が良く頑張つて金山峠を越え、ミズガキ山荘を過ぎるといよいよ富士見平への登りである。雪は地面があちこちのぞいている程しかない。途中で軽食を食べ午後四時富士見平に到着。が天気は良く、皆割に調子良くなつたので大日小屋まで行く事にする。流石に疲れが出たか、足がつる者が出たりしたが午後五時半、小屋の上部の幕営地に着いた。もう薄暗くなつている。星がきれいだ。

二又日 へし大弛
起床四時、今日も快晴だ。不慣れなせいが出発まで三時間かかり七時出発。最初がグアイセンを着ける。雪は一面にあるが良くしまつていてラッセルは全くない。一ポツツで稜線に出る。千代の吹上げを過ぎると南アヤハツ、それに中ア北アまで見える。風が強くがスでもかかつていればちよつと面倒だらうが今日は素晴らしい天気である。風もほとんどない。太陽の光が純白の雪に反射してまぶしい。十時ちよつと過ぎ、金

峰の山頂に着く。ここでも食糧にする。焚火も回復して十一時、甲武信に向かつてまた一歩を踏み出す。あいかわりアトレスが着いてラッセルは全くない。調子に朝日岳を過ぎた。がこの頃が夕南東の風が吹き始めた。低気圧が接近して来た兆候だ。南アヤももうかすかかかつている。午後一時予定の幕営地である朝日峠に到着。明日が夕天候がくすむ事はおくことにする。午後二時大弛まで行つておくと風が強くなつた。明日は停滯かも知れない。

三十日 へし甲武信の手前
起きてみると星は出ている。が風は更に強くなつた。オーバーズボーンにオーバーズボーンにアイセンを着けて出発。ひびくがスつて来た。木がない所だと風で少しふぶふぶする。国師の山頂は猛烈な風だ。が山頂を下って樹林帯に入ると余端に穏やかになる。坦々とした樹林帯の道を進む。少し雪が降つていた。東峰を過ぎた所で昼食。この分だと今日中に甲武信を越えたい。かもしらぬ。十一時昼食を終えて歩き出す。いくつかに小なピークを越えて行、うちが皆少しバテて来た。ラッセルはないが荷が重い。

富士見を過ぎ甲武信の一手前のピーワにかかっていた頃、バテがひどくなつた。少々無理をすれば甲武信を越えられるがそんな急ぐ必要もないのだから幕営にした。南の風があいかわが強い。雨まじりの雪も少し降っている。

三日 へ？下山
 風は大部おさまつた。かすもほとんど晴れた。そうなる今日中に下山である。きのうと同じ装備で二時に出発。日向に出ると朝日さまぶしい。急な傾斜を半ピッチで甲武信の頂上に立つ。そこで金峰の山頂以来初めて他のパーティーに会つた。景色は素晴しい。朝日を背にブローケンの怪も見えた。南アヤハツけきの雪で白さが一層増した様だ。そして金峰や国師ももうろん見える。あまりにも調子良く行き過ぎた。拍子ぬけの感もあるがやはりうれしい。記念撮影の後甲武信小屋目がけて下る。小屋から急な登りを最後のピーク木賊山へ向う。二十分山頂通過。そこで西へ向う。布を見つけてる。なせかなつかしい。ちよつと行つたところまで右戸渡尾根に入っている。驚いた事にミニにもトレスがつかない。倒木で時間をくたが、ラツでルが

4)
 6:15
 10:32
 12:17
 14:30
 14:36
 15:38
 16:05

3:50
 6:58
 7:43
 11:13
 12:32
 1:17

3:10
 6:15
 8:10
 10:20
 11:10
 っ手

7:05
 7:45
 8:20
 8:24
 12:03
 13:30
 15:05
 16:59

今回の春山は予想よりほかに調子良くいってしまつた。縦走の苦しみというものはほとんどわかなくなつた。たとえ奥秩父でもいづもこの調子良くいくとは限らないだらう。だがいつの日か、我々の後輩が北アや南アの稜線を風雪に耐えて進んでゆく姿を想像するのは僕一人ではないだらう。

ないの調子良く下る。雪の量は減つたが、アイゼンがないと苦労しそうな所である。面の方が多くなつた頃、尾根をはずして左側へ急下降する。荷があまり減つていないので辛い。途中でアイゼンをははずし、十一時やつと天に降りた。昼食にする。空の色といい風といいまるで初夏の様だ。十二時出発。はぐく行くところウツク道に出る。風がさわやかだ。振り返ると木賊山が高い。風がさわやかだ。バスに乗る予定だったが、道路工事のためめ。結局天科まで歩いた。皆がバテはじめ頃、午後二時半天科に到着。もう水がうまい季節だった。

- 。参加人員 二年一古西 (1) 水口 (S.L) 山本
 伊東 渡辺 長谷川 中村 早瀬
 一年一永井 在間 田口 木俣 小口
 OB 上遠野氏 滝口氏

る。驚いた事にここにもトリスが、ラッテルが
いた。倒木で時間をくたが、ラッテルが

OB一年上遠野氏 在籍 滝口氏 匠氏 木俣 川

[コ	3月28日	6:15	10:32	12:17	14:30	14:36	15:30	16:05
ー	新宿							
ス	新藤							
タ	増属							
イ	金山峠							
ム	軽食							
	富士見小屋							
	29日							
	起床	3:50	6:58	7:43	11:13	12:32	13:17	
	稜線							
	10:13 金峰山							
	朝日岳							
	13:07 朝日峠							
	13:55 大弛							
	30日							
	起床	3:40	6:55	8:00	10:20	11:00		
	10:25 国師岳							
	13:55 東林							
	(甲武信のロープ)							
	31日							
	起床	7:05	7:45	8:20	8:24	12:03	13:30	15:05
	17:34 甲武信岳							
	木賊山							
	戸渡分岐							
	11:06 又ワ天							
	14:36 天科							
	15:55 塩山							
	16:59 立川							

○装備一覽

テント NO 12 (五人用) 一式

21 (八人用)

スエルト
ツエルト
テント
ブラシ
ローソク
ゴミ袋

○右油関係

右油コニロ 大6 (予備)
右油 小1
メタ 石油ポンプ
台皿

○炊事関係

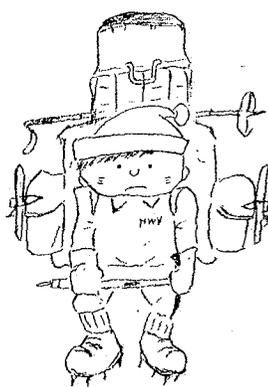
ナバ 各テント2 (コップ、フェルも含む)

○その他
医療

天気図

各種修理具
針金

飯バ
水ポ
お玉
砲丁
食器
キツペ



まぐぐって全員無事に小屋到着。すぐに食事。これまた恒例のカレーライスという名の黄色の汁と、お後は汗粉の香。教日前で

男子 公式山行記録 — 1967.4 ~ 1968.11 —

新入生歓迎会

(4月22日)
(先発隊)
川乗橋 16:30
17:40 百尋の滝 17:50
18:20 塩地谷小屋
(23日)
(後発隊)
五川 7:15
川乗橋 9:06
10:30 百尋の滝 10:45
11:20 塩地谷小屋 13:15
14:50 川乗山 15:20
17:10 鳩ノ巣 17:43
18:14 五川

参加者 (こ内は先発隊)
一二年三年
男男男
111
555
人人人
勝島先生 12人
OB女女女
1053
人人人

二三日
立川駅に七時集合。教日前か
分の準備、先発隊の出発。又女
子の場合は一年が前日まで参加
者がはつきりしなかつたため、
既に二年はいささかグロツキ
やがて全員集合。昨年の様に遅

刻者がいなまてヤ
も一年も互いにジ
グ、あの一年生、ニ
山靴、スゴイ。電車
年が歌集をひろげて
てや歌集をひろげて
て米川かウのバスは
分の悪くなる者教人。
着。体操をして出発。
ある谷のついで、緑を
自動者道路を行く。途
ゴとくはリ紙が教現
去年よりウソは少ない
のかけらもない様なの
一年に饗餅を招くので
ポツ千で百尋の滝着。先
年女子が武向えに来た
場所柄の巨めか、なん
ぶりの様でうれしい。い
がら、滝の回りは人が多
なかつたが、気持が良
も千伝ってか、一年は
そう。滝を出発。一年
つ塩地谷小屋へ。一年
一人遅れ気味になっ
イレツトパーパーの
歓迎ア一千





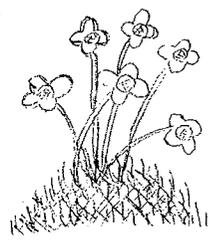
やがて全員集合。昨年の様に遅
イレゾトパーの歓迎アーク

をくぐって全員無事に小屋到着。すぐに食
事。これまた恒例のカレーライスという名
の黄色の汁と、お後は汁粉の香。数日前で
きたばかりの「峰」をひろげてノドの体操。
食事も終わって靴とガックと口マのひもを
締め、サア、山頂目指して出発。長い列
の中、器具係のナベボたを採す声が飛び交
う。踊平を過ぎた頃、はるか彼方から異様
な声が響いて来る。山頂に近づくと「フ
アイト」の声はしだいに大きくなり、「フ
アイト」をかけたも全く締まらな
い。応援の練習かと思いきや、騎跨の練習とわ
かり、こんな所で一同理然とする。「ベン
シーセイ」十四時五十分予定通り山頂到着。
川乗は山頂の汚れがひどいが、眺めは抜群。
今までに登った山、これかク登る山。皆の目
が、古西君の指さす方に。十五時二十分下山。
S君の鍋の指さす方が。十五時二十分下山。
S君の鍋の指さす方が。十五時二十分下山。
リズミカルに一気に鳩ノ巣へ。混んだ電車
にもまれながら、やたがにバクついてい
ると、とても眠い。いつもの山行よりず
と疲れてしまった。今こみにいる全く見
知らぬ者同士の一年生達も今日を境に、私
達がそうであつた様に、一つのテントに寝、互
いのぬくもりを感じ合ひ、顔を付き合
わせた。一本の鍋かク食するのだ。
（山田記）

御前山

(5月20日)	
立川	15:21
五日市	16:45
数馬	
(21日)	
起床	4:00
出発	6:30
数馬峠	8:05
月夜見山	9:25
小河内峠	10:10
御前山	12:00
大ダツ	13:10
永川	15:41
立川	

参加者 三年一永井
古西 (SL) 水口 鏡木 (L)
荒木 長谷川 早瀬
永井 在間 平野
石川 小口 宮崎
願間 尾形先生
OB 木近 藤山 渡辺
三浦 中石 中石
等氏 山坂 村入
伊二年
田一年
口一



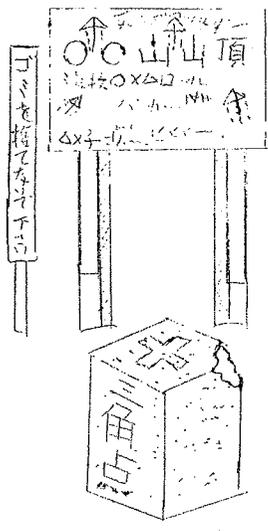
丹沢主脈縦走

二十日

立川駅、三時集合。一年は皆元気そう。二年も今年度初めての山行なので皆張りつてゐる。五日中駅に着いて驚いた。というのは明日は西東京バスがストライキなのだから。これは我々の全く予期しなかつた事だ。今の今まで三頭山、浅間尾根という山行をするつもりであつた。ストになるとうらして本宿が五日中までを歩きた通さねばならず、それでも二年だけならどうにかなるとして、一年には初めこの山行だか、無理であらう。二年、三年の間で協議した結果、止むを得ずコースを変更し、バスの心配のない、教馬峠、月夜見山、御前山、氷川と決めた。この日は教馬で幕営。河原に場所を見つけて、ヤツと四張乗る事ができた。明日の朝六時にはもう一度様子を見ようという事で就寝。

二一日
やはりストだぞうだ。午後には解除になるかも知れないと言うが、万一信用して解除になつていなかつたらどうもしたくない事になるので変更のコースを行く事にした。教馬峠まで二ピツキ。今日は暑くなりそうだが途中にこれだけかけた橋があるたので川原に降りる。教馬峠から先の道は

奥多摩縦走路として踏まれているので心配はない。ただ歩くのみ。俺は寝不足のせいが目がチカチカする。一年はどうかと思つてみたりもするがこの時の一年の気持ちは二年生にはとてもわかるものではないだろう。太陽が上るにつれて気温もぐんぐん上る。あまりにも山行日よりなつてしまふ。二年もバテ気味。その反面一年の強さにあきれれる。御前山の登りはかなりきびしかたが、順調に行き山頂で昼食。展望はあまりきかなくなつた。けれど三年生のカルピスは格別にうまかつた。下りは一ピツキで大ダワまで行き、沢へ降りずに駒山を巻いて後線を下る。暑さで皆相当バテていたのでファイトをかけて頑張る。未川駅が見えてくるともうあと一頑張だ。ここは林道へ出る直前に入りが足を滑らしてしまつた。相当バテていたので少し休んでから駅に着く。一年の手前もあつて彼の胸中をさする思いだつた。(荒木記)



降りそうだが途中にこの川がけの橋がある。たの川原に降りる。数馬峠が夕先の道は

丹沢主脈縦走

(6月24日) 14:11
 下北沢 16:20
 大倉山 18:55
 大堀塔 (25日) 4:00
 起床 6:40
 丹沢山 7:45
 蛭ヶ岳 9:25
 原野 11:05
 (バスで八王子) 本橋王
 (バスで八王子) 本橋王

参加者 三年 | 永井 (C.L.) 山本 二年 | 古西 (S.L.)
 水口 荒木 山本 伊東 鈴木 渡辺
 岡入 長谷川 中村 早瀬 一年 | 永井
 在間 中山 浜 近藤 平野 田口 木
 俣宮崎 顧問 | 小林先生 OB | 梅原氏
 滝口氏

二四日 大原から歩き始めた頃にはもう四時半になつていた。しかし六月の事で日はまだ高く登り一方のだから少し坂をじつくり登る。一時間程で休憩、歩き始めるとすぐ急な坂であるが、すぐ平らになり、また短

る。薄暗くなり冷えて来た。歩き出してからしばらくして懐電をつける。比較的重い荷物をしよって夜道を歩くのだから、一年には相当の心理的負担であつたが、少しもバテない。しかし花立の頭のあたりになると、さすがに遅れる者がでて来た。力ク声をかけながら登る。我々の背後には、秦野、横沢の灯がきらめいている。花立を登りきり、横沢の中を降って登るとそこは山頂。すぐテントを張って二年は水くみに行く。これに意外に時間食い、またまわりのテントがうるさいので寝るのが相当遅くなる。

二五日 四時起床。飯を作つて、かきこむ。一年生でやけに食うやつがいる。山頂を六時四十分に出発。下つてすぐの所で一パイトイを追い越す。丹沢山は通過。初夏の美しい原生林の中を登り降りし、不動の峰、柵沢の頭を過ぎる頃休憩にする。蛭ヶ岳には九時ちよつと過ぎに到着。素晴らしい眺望で、ここで記念撮影する。山頂からは今までと違って、ほとんと眺望がさかない。ずんずん下つて、原小屋平に着くと昼食。皆が三年の差し入れのメロンをうまそうに食つている時、小林先

ゴキウ橋で下り

ひっくり返る。歩き始める頃かぐ、ポツリ
 ポツリ雨が降り出し、やがてホンキョを着
 なければならなくなる。いつ着てもホンキョ
 ヨは憂うつな物だ。しかし一年はこの天候
 に幸いされてバテる者なし。焼山を巻いて
 ぐんぐん下るとやがて畑が見え出し、川を
 越えるとすぐに停留所である。去年の六月
 山行に比べて、非常にあっけない。夏山の
 訓練としての、六月山行の役割を考えると
 少々不安になった。
 (中村記)

川乗山集中

九月十六日、十七日

十六日
 〇Bも含め、部をあげての集中登山であ
 たが、天候が悪くさななかつた。実力考査
 もそこそこに川井ギャンプ場へ。夕食はたき火を
 広い河原の幕営地は快適。夕食はたき火を
 囲んで、ワングル自慢のおでん。女子は終
 始賑やか。来る時から不調であった木俣が
 高熱を出したので、七時頃、二年二人で送
 り届けた。夜半に小雨。
 (渡辺記)

十七日
 逆川隊 二年古西
 近藤 小口
 〇B西
 中村 (C)
 梶内氏 (S)
 三浦等氏
 渡辺、一

5:25	川井	5:43
6:30	川乗橋	
7:30	逆川出合	7:40
10:55	大ツ沢出合	
11:55	ウスバ林道	12:25
12:40	二又	
13:00	大巻	
13:25	稜線	13:40
13:55	川乗山頂	

水量の増した火打石隊と別れ、河原に降りる。
 はき替える。深く岩をうかがった逆川に大いに
 闘志を燃やす。深く岩をうかがった逆川に大いに
 矢敗。続くやすい。出合の小滝はへたりきらずに
 れて滑りやすい。出合の小滝はへたりきらずに
 む越え。ある時は直登し、進む。水勢はすさま
 まじい。雨間の割には距離がせげない。大
 ギワ沢の手前で休憩。ここを過ぎると、岩さ
 らぬ。未だ行が浅くなり、広葉樹の下をく
 ぐり出す。途中、岩が食いつんだ滝がある。
 この壁をへずるのだが、足がかりが良くなる
 手間どる。Mはいとも簡単にへずり、安定ナ

ンバーワンの称賛を梶内氏より受ける。ヤ

1031505

しん

リ届けた。夜半に小雨

ンバーワンの杵積を楳内氏より受ける。やがて大ダワ沢出谷。川幅も狭くなる。ただ幅10mの滝は水のカーテンの観あり。惜しいが高巻く。あとウスバ林道まではあけなかつた。ここぞ昼食。雨は小粒だが降り出していった。適当にて出死。二俣は樹木の下でひっそりとしていた。右俣と樹木の下で、その奥に二十mの大滝があるのが不思議な位だ。この高巻きは、巻くと言つても中々の悪場で木の根につかまつて、強引によい登つた。浮石が多い。ここを最後に奥に穏やかになる。右側に尾根があった。たが、ためしに行つて見ると道があった。沢登りも飽きてきた頃、うまく川苔山の水場の標示のある所に出た。靴にはき替え、そしてしんがりではあった。が、予定より早く山頂に到着。変化に富み大いに楽しめた。廻行であったが、悪天が悔まれた。(渡辺記)

一火打石谷隊 三年一八島 二年一水口 (CL)
伊東 (SL) 早瀬 岡入 OB 山本氏

滝への分岐で逆川隊と別れ火打石谷に向う。百尋の滝の少し手前まで来た。ここぞ百尋

逆 7:00
で 8:31
ま 9:35
小屋 11:40
と 12:45
聖 13:20
火打石谷
ウスバ林道
屋小屋
隊と小屋
川 聖
（アッパルン）
10:10 昼食
12:25 橋
13:20 川

の滝を登られる、目次上遠野両氏と別れる。川乗本谷を通つて火打石谷出谷にきた。この谷は他の二つの沢と比べ懸垂下降などの技術が必要な沢なので、ジャッケンにより精銳が選ばれた。初めは単調なただ石ころが行くところか、下降ができるという付録を持つた、目当ての滝である。が、ここを捜しても水しぶきがかかると、あきつめよう。上の岩の所を通つて二つの滝を巻く。残念だ。ここから一時間位の所で休息をとる。もうただ最後のあまり当てるな分ない。10mの滝を残して、当てもなく沢を登っている。先程の休息より一時間後川に張り出した岸の下に到着。ここぞ昼食。その後もう半ばあきつめていた懸垂下降の練習をOBの山本さん指導のもとでやらせてくれた。二回目の卒業試験の時は何んとかうまく出来た。もうこの廻行も終わりに近い。しばらく行くと五m位の滝とは言えない様な落水がある。

った。この逆行のうちがイトブツクにあつた。大きな老は一つも僕達の期待に答えてはくれなかつた。逆行を終る登山靴に履き替へる集會場所である川乗山頂に向う。この時間からすればトワゴで頂上だ。しかし残念な事に真名井沢隊に一時間近くも先を越されていた。(伊東記)

〔一〕名井沢隊一男子 二年一長谷川 (CL) 荒水 (SL) 山本 一年一宮崎 田口 在間 OB 一平沢氏

7:13 北川橋
7:35 わらじ着
10:10 昼食線
12:15 稜山頂
12:55 山頂



逆川隊、火打石谷隊を見送つた後、最後に残つた我々はテント場のあと始末をして川井駅に戻り、皆のガツクを駅の中に置かせても分つてからいよいよ出発である。時間には余裕があつたので、駅から歩いて行く

〔真名井沢隊一女子〕二年一藤田 (CL) 入戸野 (SL) 長島 一年一依田、東郷

事にした。三十分足らずで北川橋に着き、更に少し行くと真名井沢出合に到着した。雨の為、水量が非常に増しており、滑りやすかつたので、すぐにわらじに履き替へた。下流のうろは川石の道を歩いたりした。段々形を整えて来て、滝なども出て来る様になつた。しばらく行くと女子が休んでいる所に追いついてしまつたが、我々は休まずにどんどん進んで行つた。幾つかの小ヤチ滝を越えて行く。いよいよ魚沼の滝だ。水しぶきが降りかかる。滝のすぐ横の岩を登って行く。雨が降つたのがかえつて幸いして、我々にてごろなおもしろい沢登りとなつた。十時半ごろ昼食にする。昼食のあとまたしばらく行くとわらじが沢山捨ててあつた。ここは普段は水が涸れる所らしい。今日はまだまだ上流の方まであつた。いよいよ水がなくなりそうなので、左リタンに水をつめる。水が涸れた所から、左の方へ登って行くと赤々奈尾根に出た。平坦な所でもまた登山靴に履き替へる。雨がかさかいて、山頂着。OBの上遠野氏が一人で待つていた。現役のパイレーターの仲では一番乗りであつた。(長谷川記)

から来た男子が追いつく。少々残念である。十時昼食。いづもと遠い豊富の水を飽きり程

附一子...

(真名井沢隊一女子) 二年一藤田 (CL) 入戸
OB野 (SL) 町田氏
OG一岩崎さん 佐久間さん
長島 一年一依田、東郷、

6:15
7:30
10:55
13:05

発 橋 北川 眞名井 沢 橋
北川 眞名井 沢 橋
昼食 稜山

6:44
7:10
10:15
13:00
13:40

へ。火をたく男子の懸命な姿が白けた夕暗
の中、何と乙女心に響いた事か。少々興
奮気味。九月のミユラフでは暑すぎる。あ
まり良く眠れない。翌朝三時二十分起床。
男子の二部隊はあわただしく出発。幕営地
を出てから一時間で真名井沢に出た。この
この間バス利用。大望のわがじの履き替え
におかしさがこみあげる。沢の水がわがじ
にどつしりと吸われて、たびを通して感じ
る熱い体と冷えた足の感觸、ぬれること、
全身ぬれる事を欲した位気分が良かった。
本当に登る。岩を手足のひんぱんな運動
で。巻き道を多く使った。大時頃女子の後

一年はもう論の事、二年
はとつても初めて沢登り
なので出発前から、わがじ
やねびなど見慣れぬ物の準
備に胸をはずませていた。
九月十六日三時半に川井キ
ヤンプ場に到着。男子は石
で作ったカマドでおごんを
作る。女子は山へしげ狩り
の懸念を白けた夕暗の中、
何と乙女心に響いた事か。
少々興奮気味。九月のミ
ユラフでは暑すぎる。あ
まり良く眠れない。翌朝三
時二十分起床。男子の二
部隊はあわただしく出発。
幕営地を出てから一時間で
真名井沢に出た。この間に
バス利用。大望のわがじの
履き替えにおかしさがこみ
あげる。沢の水がわがじに
どつしりと吸われて、たび
を通して感じる熱い体と冷
えた足の感觸、ぬれること、
全身ぬれる事を欲した位分
が良かった。本当に登る。岩
を手足のひんぱんな運動で。
巻き道を多く使った。大時
頃女子の後

(伝流後)

から来た男子が追いつく。少々残念である。
十時昼食。いっもと違ひ豊富な水を飽きる程
飲んで出発。しばらくして沢が終わり、登山
靴に履き替える。わがじは木にぶら下がる。
あとには川乗山頂まで苦しい道のり。山頂に
は雨が降っていた。(入戸野記)

14:25
16:47

発 巣
山 鳩 立

16:25
18:05

頂上にはうらやみ集まらぬものあり
降りしきる雨。菓子を食った位で
そこそこ下山する。しかしOBは後
に塊々て話した。川井隊でガツクを積
そうであつた。川井隊でガツクを積
み込むための先発隊四人(長谷川、
中村、荒木、山本)は一時間で駆け
降りたものの、鳩ノ巣で御岳まで通
過の電車に乗ってしまひ。あわてて
引き返したとか。御苦勞さんでした。ともか
く本隊は川井でガツクを積み込み、無事立川
解散となった。
登 でお同日、目沢、上遠野両氏は百尋の老を
登した。

(渡辺記)

雲取山と天祖山

(10月21日)
 13:51 立川
 16:10 御祭食
 18:30 夕食
 (22日)
 起床 4:00
 8:15 三ヶ谷山
 8:55 豊取山
 10:30 昼食
 12:50 長沢山
 14:40 天祖山
 16:10 八丁橋
 16:40 鐘乳洞前
 17:25 氷川
 19:07 立川

十一月山行

参加者
 本一 伊東 二年一 古西 (CL)
 宮崎 一年一 永井 渡辺 長谷川 水口
 小口 OB 在間 近藤 田中 (SL)
 山野氏 荒木 早木 彦山

十一月十一日と十二日

で出原よりそのまま引返した。折川井の予定
 日原より三ツドツケは朝が雨のため

スキー合宿

(12月25日)
 新宿 23:00
 (26日)
 6:17 四心谷
 7:02 親原
 14:55 第2リフト下
 御殿場小屋
 (27日)
 スキー練習
 (30日)
 (31日)
 9:30 親原
 11:25 白馬大池
 18:05 新宿

参加者
 男子5人 二年一 男子4人
 女子1人 OB 女子4人
 多数 一年一

今年のスキー合宿はOBの冬山との関係で、白馬山麓の梅池に決めた。現役19名OB多数の、大借宿である。御殿場小屋をぼくがOBだけで、日間借りきることにした。男女一緒のあわただしい準備も終わりと出発する。五日の夜行で新宿を信濃四ツ谷へと出た。親原行きのバスを降りると、そこはゲレンデだ。朝食後リフトに

乗って御殿場小屋へ向う。荷はバラにして古西がバツ

だドジを踏んでしまった。いざ、梅の森ゲレンデへ。選りフリフトを降りて、みんなの背へ

て出来したが、十二日は朝から雨のため、日原よりそのまま引返した。

すりにすり作着せ、先乗(乗)扉(扉)のト(ト)降(降)りると、そこはゲレンデだ。朝食後リフトに

乗って御殿場小屋へ向う。荷はバラにして運ぶ。第二リフトの乗り口で、古西がパツクしろと言う。歩くのだ。御殿場小屋までは、ここからリフトで約三分ある。てはやくパツクして、スキーをザツクにつける。いざ背負ってみるとさすがに重い。四〇kgほどありうか。団体装を持たない女子がうらやましい。一路バス道を御殿場小屋へ向って出発。けっこう調子よく歩ける。だが、始めのうちほいたいしたことなかつたラッセルが、甚しくなるころには、遅れる者がでてきた。列は二つ三つに分断されてしまう。それを途中で整えて、歩き続ける。二名ほど非常にバラバラでいた。結局五時間かかって十五時に小屋に着いた。冬山合宿を終えたOBのかたが大勢出迎えてくださった。昼食後すぐ夕食の準備を始める。あしたからはいよいよ練習開始だ。

二日目、まず直滑降から。新雪が深くても滑べれない。しばらくすると恰好のゲレンデができる。一年は直滑降、二年は斜滑降、OBの親切な指導を受けた。みんなメキメキ腕をあげる。

三日目、今日は遅れて東京を出た荒木が来る。OBの平木さんと僕が迎えに行く。下へ降りて来るともう荒木の姿はない。とん

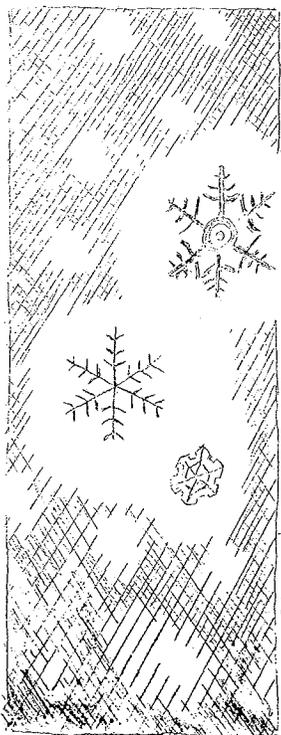
だドジを踏んでしまった。いざ、梅の森ゲレンデへ。寒いリフトを降りて、みんなの所へ降りて行くと、大きな口をした荒木の顔があった。

四日目、予定していたツアーは天候のため中止。今日からは二年も指導に担る。バス道を親ノ原まで降りてみる。けっこうよく滑べる。帰りのリフトは凍るほど寒い。

五日目、二年はシユテムクリスチャニア、一年は山回リクリスチャニア、スキーが楽しそうだった。最後の一日を思いきり滑べる。

六日目、三日目。いよいよ下山。親ノ原まではスキー。そこからバスで白鳥大池へ行くはずが、前のバスがひっくり返ったとかで、徒歩で行く。大池で、新宿行き急行列車に乗り込む。右手に北アの白い山々を見ながら、一路東京へと列車は走る。大晦日の夕方に新宿着、妙なときに帰って来たものだ。

(水口記)



入笠山

(1 月 13 日)
 八王子 15:19
 若宮 18:45
 (14 日)
 発地 5:15
 幕営地 11:50
 (15 日)
 起床 3:50
 発 7:05
 入笠山地 8:46
 幕営地 11:00
 若宮 13:50
 富士見川

参加者
 伊東 三年 | 八島 二年 | 古西 (C1) 水口 (S1)
 田口 渡辺 長谷川 早瀬 滝口 氏 山野氏
 小口 木俣 OB 1 滝口 氏

十三日
 若宮部落には、うまくバスがあり早目に着けたもの、おりからの雨で雪は解け、幕営には、ます向かなかった。窮しているところには、ます向かなかった。窮している。言めていた、たける事になつた。今は使つていない。離れとの事だが、快適な一夜を過ごせた。見も知らぬ自分らへの親切な一夜を感謝し、眠りにつく。

十四日
 未明に出発。積雪は山麓を登るにつれて増し、尾根トリツキでは、三十mほどになった。植林帯を進む。明け来て来た空は、黒雲に覆われ、僅かに東方低く広がる透間より光がた、真紅の太陽の光も、すぐかき消された。松目より来る林道を横切り、樹林中を登る。雪量も増し、ラッセルを交代しながら進む。低木の尾根へ出ると、さらに雪深く思ふ。様には進めない。トリツキより三ピツキワカンを着用するが、それでも結構もぐる。一mはあるだろう。雨で表面の雪が固まったのか、静かに足を置いて、体重を移すと、ホコリと来る。ボコリ、ボコリで、時には腰までももぐるから始末が悪い。皆、バテ気味でピツキが上から始末が悪い。皆、バテ気味で腹も減って来た。さえぎる物とてない。緩線である。風は雪を交え、横なぐりに吹きつける。視界はさかない。雪がしまつて、ワカンが映くさまり出したのが、まあ、慰めである。やむなく正午近く、分岐の手前の鞍部、樹林帯の中に幕営した。当日の入笠山往復は中止し、昼食後、一年にはアイゼン・ピツケルの操作を教えた。なお、出発の際、名取さん宅には、お礼の手紙を残しておいた。

十五日
 予定では今日は釜無山往復であつたが、

八ヶ岳

二名とOBで赤岳へ、残りは硫黄岳へ、四日
目夏来峠近くへテントを移動、五日目稻子
場へ下山。

三月二十日新宿で大勢の見送りを受けて
夜行列車で出発。翌日、茅野よりバスに乗
り換えて七時ハゲ岳農場に着く。もう阿弥
陀岳の姿が近い。天気も晴れで、前年の春
山の入山よりずっと春らしい感じ。美濃戸
を過ぎると雪の道となる。入山者も多くラ
ッセルの必要は無い。昼の陽がしの中に我
々は赤岳鉱泉の広い平坦地を見出した。我
々はその一番上にテント場を選んだ。午後
OBの平沢、平木両氏が赤岳から下って来て
平木氏が我々に合流した。その日全員で中
山乗越まで下見に行つたが、その頃かう天
候は悪化し始めて小雪がうらついて来た。
二二日 雪 出発を見合わせていたが十
時過ぎ雪の中を出発し、行者小屋の近くで
アイゼン歩行や滑落停止などの訓練をした。
雪はやわらかくて訓練は少々ものたりなか
った。その日アイゼン歩行の練習と偵察を
兼ねて中岳方面へ森林限界まで登る。阿弥
陀と中岳の間のコルへの登路は雪崩が起る
危険があるようだ。
二三日 依然として風雪。天気図をとっ
てみても西高東低の冬型でうろがあかない。

赤岳は今日はあきうめて十時過ぎ硫黄岳へ向
う。赤岳鉱泉から直接に硫黄岳へ登る尾根筋
のルートを選んで登る。森林限界を出る前に
風のない所で昼食をとる。森林限界を出ると
流石に西風が強い。支稜線の上に出ると吹雪
はさうに激しく視界は二、三十メートル。自
分達の位置を確かめながら登る。岩が露出し
ている所に来たのでそれまで併用していたワ
カンをはずしてアイゼンで登る。頂上は平坦
で風が極度に強い。写真だけ撮ってすぐ下山
を始める。西向き顔面に雪が吹きつけて前
が良く見えない。ルートを確認しながら無事
下山することができた。テントに帰ってみ
るとOBの山本氏が来ていた。その夜の贅沢な
肉いための夕食の後、二年とOBが明日の行動
計画を協議した。
二四日 また風雪は続いている。天気図の
上では移動性高気圧が張り出してきて望みが
もてる。OBの小川氏は多忙のためこの日帰京。
我々は昨日の協議通り、二隊に分れて中尾、
永井とOBの山本、平木両氏が硫黄石室から赤
岳を自ずす。残りは中山乗越で彼らを見送っ
てその尾根を西へ向い、美濃戸中山という山
へ登った。ここは入山者がほとんどないよう
で大変なラッセルである。肩頃になると天気
は相当好転し、静かに舞う粉雪が陽の光にき

かりと光って青空を飾る。美濃戸中山の頂
上に着く頃、阿弥陀、赤、横、硫黄の峰々
が雲の戸から見え見え、台り。やまま

も山そのものは人間の時で興る限り永遠
に不老不死の存在なりだろう。ハゲ岳の山麓
にはもう暖かくうらうらの春が来ていた。

二三日 依然として悪寒。ラッセルとて。は相当好転し、静かに舞う粉雪が陽の光に

分りに光って青空を飾る。美濃戸中山の頂上に着く頃、阿弥陀、赤、横、硫黄の峰々が雲の中から姿を現れし始めた。我々はこの無人境に昼食をしばしのいこいをとって後、赤岳隊に期待をかけながら中山乗越へ下る。途中、赤岳隊に出会った。その報告は予想をこえていたとは言え、残念であった。赤岳隊は行者小屋から横岳石室を指して登ったのであるが、新雪のラッセルと急な傾斜のため歩は進まなかった。結局二時間程登ったが、これ以上急な岩稜を登ることに、赤岳への稜線の通過の困難を考慮して引き返したとのことであった。今ニコか分赤岳の麓に一筋の足跡が見える。我々はニコか分テント目がけて真直に下った。夕方方快晴となる。赤岳は夕陽に赤く燃えている。テントの上には大同心、小同心が立っている。雪を被った木々。この雪景色はあまり美しく雄大でまだ我々の手には余るものだった。夜には満月が出て、この雄荘な雪景色の上には青白い光を投げていた。

二五日 快晴 天候は回復したものの、雪の状態は昨日と変化はないと判断して赤岳を断念して下山する。振り返って見ると八ヶ岳の峰々は入山の時と変わっていない。山は風雪や雪崩で刻々の姿は変わって

(コースタイム)

3月21日 17:35 小岳農場
美濃戸 10:00
10:35 昼食
12:55 赤岳乗越(中山)
22日 10:45 中山乗越
11:05 行者小屋上
14:25 中山
15:25 鉦泉
23日 10:40 昼食
12:00 昼食

13:10 硫黄岳
14:30 鉦泉
24日 10:20 中山乗越
10:40 中山
12:55 美濃戸
14:30 鉦泉
(赤岳アタック隊は石室の下まで引き返した)
25日 7:30 美濃戸
10:10 八ヶ岳農場(バスで茅野へ)

も山そのものは人間的な時間で測る限り永遠に不老不死の存在なのだ。ハヶ岳の山麓にはもう暖かくうららかな春が来っていた。

参加人員 二年一八島(川口氏)
西本 一年一八島(川口氏)
平木 菴口氏
伊東 中尾(永井)
小川 早瀬(永井)
山本 古山



公式山行記録

1966.10. ~ 1967.2.

(11月19日)	
中川	15:20
大滝沢出合	17:50
幕営地	19:23
(11月20日)	
発	6:26
大滝峠	7:08
8:12 畦ヶ丸	8:22
分岐	8:37
白石峠	10:25
10:50 加入道山	11:40
12:38 大室山	12:50
13:50 林道	
16:40 東野	

(9月30日)	
氷川キャンプ場に	
て幕営	
(10月1日)	
起床	3:30
発	6:10
8:30 六ッ石山	8:45
10:40 昼食	11:40
12:40 鷹ノ巣山	12:50
14:42 セッ石山	14:50
15:00 ブナ坂	
(10月2日)	
起床	3:30
発	6:36
7:36 雲取山	8:00
9:10 不通箇所	10:40
飛龍山を指したが引返す	
11:25 三条ダルミ	11:35
15:35 御祭	15:50
16:15 鴨沢	

西丹沢縦走

雲取山

参加者 山中尾者 伊東村 古西渡

早瀬 山本 渡辺 古西 中野 藤田

参加者 山行直前に風邪による不

参加者 二井年 (S) 八島 (C) 宮武

一井年 石橋 早瀬 伊庭 山本 早瀬

勝年 (S) 渡辺 早瀬 古西 伊庭 山本 早瀬

中村 和地 荒木 古西 伊庭 山本 早瀬

松谷 長谷川

一年 | 荒木 伊東 岡入 古西 中野 藤田 長春川

早瀬 水口 山本 渡辺 入戸 野村 藤田

二
三日

た。後に残った五人は、空身でとにかく和
田小屋まで行くことにした。二時間ラッセル
して登って行ったが、小屋まで行くのは
無理と判断して、そこで昼食を食べてから
斜面をゲレンデとし、一時間もかかり滑って
テントにもどった。二時間もかけてラッ
セルして登ったところなのに、滑って下
ったが、わずか五分で着いてしまった。明
日はいよいよ皆と会えると思うと楽しみで
ある。

三十日

七時出発。二時間半で八木沢まで下った
が、皆は夜行バスで来て、朝食を食べて終
我々を待っていた。和田小屋まで行くこと
にして、十時十分出発。いままでと違って
変わった上天気である。皆、快調に進んで
行った。昼食を食べている時、小屋の人達
がワカニをはいって、追いついて行った。板
川の小屋に十六時四五分に着いた。いま
は急登である。日が沈み、次第に暗くな
て行く。ふと空を見上げたが、満天に星が
輝いていた。ナカ時羊に小屋に着いた。

三一日

小屋の前の斜面で、スキー練習を開始し

降かた始めて、プルシクホルゲンあたりまで
した。たおし、水口と長谷川、それに二年生
二人は、テントの撤収に行った。大井そのな
ので、夜年越しそばを作った。

一月一日

新しい一年が始まった。おせう料理を作っ
たりして、わずかながら正月気分を出した。
今日は小屋から少し下り、広い斜面で練習を
した。二つの班に分かれて、斜面降かた横す
べり、山回りなどをしている。谷川岳
縦走隊がやって来た。夜はOBとの交歓会。歌
を歌ったり、平沢氏差し入れのパイを食べた
りで楽しい時を過ごした。

二日

今日も、昨日と同じところで練習した。今
度は三班に分かれ、山回りワリス千ヤニアヤ
ミニテムボーゲンなどを練習した。皆が来て
からはほとんど降がらなかった雪が、また降り
始めた。

三日

小屋の前で最後の練習。一年生は、一人一
人、ミニテムボーゲンのテストをした。この
合宿に来るまで全くの未経験者であった。中
も、どうやら分れる様になった。夜は明日の
下山に備え、パツクをした。スキーにシ

三
小屋の前の斜面で、スキー練習を開始し

も
下山に備え、バツクをリしたり、スキーにシ

ルを付けたリした。

四日

雪、起きてみると、小屋の二階の窓まで
雪が積もっていた。その日のため、今日は停滞
することになった。一日中寝たり、ト
ンアをしたりで、ゴロゴロしていた。ラジ
オを聞いていたら、小室の下で暮らして
たパーテイーに、捜索隊が出されたとい
う。夜、小川さんや福田さんから山の怪談
も聞いた。おびえきってしま
も、おびえきってしま
五日
今日もまた、停滞。QRの人け、強引にラ
セルを討取、被川まで行、たそうである
六日
雪はやみ、からりと晴れた。いよいよ下
山である。被川までは、シールをつけてゆ
く。りと下、て行。昼食を食べてから
は、ほとんど快調に滑り降りた。八木天
下、十三時三十分に着いた。湯天、全十
で、一分の電車まで、一路上野に向か、た。
(長谷川)

大菩薩峠

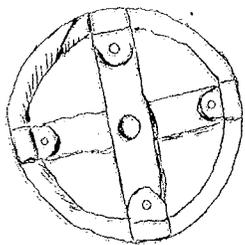
(2月11日)

新塩	6:45
石川峠	6:55
上軽峠	10:40
食後	10:00
旧峠	11:15

(2月12日)

食後	11:20
岩手	11:35
全峠	11:15
赤天	9:55
日糸	10:10
橋立	12:05
梁山	14:20
氷川	

参加者
山本 二年 八島 (C.L.)
中村 一年 古西
木村 山本 岡入
O.B. 小川 氏
伊水 中尾
東口 早瀬 (S.L.)
長谷川 永井
川 疫井
荒 丑



は、このまま朝日まで行こうか？ドンく下で朝日の下まで来多。途中、バテ気味のバレーに合会う。年の差正感する。登食後、サア朝日を登る。木立の中を進む。黙々と歩く。コバイケイソウが、ワシサカサカいていた。頂上までアイトの奥で、何日回ったか。頂上の人達に、変身目ごみられた。頂上ゴッソリ休み草宿地へ行く。雪溪の橋。せまい場所にはやと乗る。献立はクラタンからマカロニとドンへ変更。ニれ金二技術不近のため、食後、大いに迷ふ。合会。夜更。花火をやる。最後にジニンカを皆で踊る。もうすぐ合宿も下しまいである。夜の星が、ヤケに目にしみた。

八月九日(朝日蓮華温泉)

今日は、途中にモッコ渡りのある日。音期待して進んだ。崩下った朝日が、もうお人々に遠い。間頭の瀬戸沢に看く。まさかOBが獲り、回二う岸の。お一人様一回限り。料金無料。身の安全保障しません。音、各々の体重を気にしからソロリと乗る。案外とロープは丈夫で、ちぎった人はいなかた。モッコ渡り終下。

ヤグチヤゴテントは乗れたい。ニれは蓮華まで行かなくてはならぬ。途中、泥沼にハマる者二、三名。着、キャンブ場のせいか人毛も、合宿最後の晩のせい、食料を食ハつくす。食後、歌を歌う。最後の晩のせい、それとも、清腹で声もでないのか、皆何となくシンシリしている。とニかごせくすれでもあーたのか、遠く地がりが響いていた。

八月十日(蓮華温泉(新宿))

今日で最後である。二か山口まで行き、そニからバスである。首を心も軽く、トノノと歩く。温泉口着、人がスラ、と並んでいた。バスに乗り込み、手岩から森上々して本。二二ご一時間自由、各自、自由で食事をする。一時、開後、針行でノンビリと東京へ帰る。直中、歌を歌ったり、合会思い出となつた合宿中の事を話したり、音、旅した様子、二れ一、一ちもたい。最初のうち、慣れないうち、一年生もクンと貫録か、いたまうである。陽焼けとホコリと汗のせいかな？三年生も、一旅最後の山行を祝福する。たでし、二年生、三年生、おは、やはり他の二年生が参加できなかった。事は一着残念だ。帰、たら一つ残らず、お山行、集りか。

	B	L	S
4	お弁当	カンパン キウリ シュム クレソジュース	上総汁 御飯 お茶
5	御飯 みそ汁 清け物	カンパン ソーゼジ クリーム ソーダラップ	カレーライス 御飯 福神漬 ゼライス
6	御飯 ポターシ ルリかけ	レーズンクラッカー レモン チーズ ソーダラップ	豚汁 御飯 お茶
7	御飯 とろろ汁 肉の煮つけ コブ	カンパン チーズ ジャム 乳酸 バモト	グラタン クラッカー 紅茶
8	御飯 みそ汁(不 ^レ 糖) 清け物	レーズンクラッカー レモン コーラ	五目寿し コンソメ 焼ソバ
9	御飯 みそ汁(7かけ在) 清け物	自由(外食)	
T	即席焼ソバ	レーズンクラッカー ソーダラップ	イタリア風リゾット

幕管用具			
6人用テント	2	ゆしなバ	1
張綱	2	ジョッフェル	2
スコップ	1	食器	35
石油コンロ		食包	4
台皿	4	おまな板	2
石油	6ℓ	しゃまじ	3
石油ポタン	3	シャワシ	2
メダ	5	布	3
はり金	2	布	6
石油用ポンプ	1	布	1
ラジオ	カメラ	天気図	
時計	医薬		

食糧。反省
乾燥野菜は、できるだけ持って
行く。食糧は、意外と寒かった。
器具。石油のランプは意外と寒かった。
個人装。ミラフは意外と寒かった。
食糧代 一 二〇〇円 米八合

六月山行 (ツバツ山)

例年に比ベグツト減ったが、四人の部員をなんとか確保できるメドが付き、喜んだのも束の間、一年に初めて山行といふことと張りきつて二年に於いて、一年の参加一名というまことに乏しい前奏曲で始まった六月山行であった。

六月十七日、クラスマツ十の歓声がよめく学校を出発。三年は試合に出場とかな一年一名、二年四名、それにラ年度が分顧肉になされた中村道雄先生の総勢六人。じうでしよら、このしよぼくやかた。まあ、天氣のよいのがせめてものなぐさめである。この他に、三年二名、OG、OB、各一名の計十人なので、デントトニ張。そこで一年は、二年22kgの荷とあつた。立川木川、バスで日原鐘乳洞下車。五分ほど歩き、幕営地着。昨年比、川の水が少なくなつた。さつそくデントトを張るのに続いた夕食準備。中村先生、初めその山行のじいか、シチエーの味をしたり、ビニールでテールをつくつたり、ソワソワ。二年OGの到着で夕食の支度を。差し入れの果実が何種類もあり、満腹になつたところ

で、明日の予定も考慮して、早目に就寝。一年には、この川の音が耳につくだろう。十八日、三時半起床。天気は上々。今回、天気はついていて、少し暑い。昨夜遅く着いた山本氏を過ぎて、六時半に幕営地出発。中日原までバス通りを戻り、それから、いよいよ登りに肩がいた。右手前方、まさかこんなとこにあった。この辺はずいぶん切りだして、昨日に来た時には、ここを水が流れて、一杯通過。一昨今は、ほんのり木が流れて、40分ほど待望の昼食。昼食を持って、私にとつては二重の喜びである。エネルヤを補給して出発。この辺が、仙元峠まで、中と平坦な道を行く。さて、いよいよソバツ山の登りだ。今までは、変わつて急な登りが丈のある草むらの中を続く。フアイトを連呼して頂上到着。猫の顔ほい、山頂で、我々だけ、いっは、いっは、つてしまつた。眺望も、それほと良くない。つえとあれが、山頂か。え、まだあんなに遠いの。頂上登。一ピツキで、路平に着いた。さう、みなれた川、山分岐着。ここから古里駅までは、平坦な道を、下りだけだが、三時、

あまりの行程を考えると、二年は、

食後、柿やキナメルなど食べて、明日の準備をしてシユラフに入った。月日は三時半に合わせた。さあ、明日は頂上だ。

おかしい。ベルの音がしない。今、何時？
 ……五時十分前。大変だ。ねすぎである。
 あわててとびおき、シユラフなべマッ
 チ……佐久間さんや八島さんの応援があ
 つて、出発は、ヒツタリ一時間遅刻。
 サブで出発。時間がたつにつれて、少々心
 配された天気も良くなる。まわりの山々ハ
 紅葉が美しい。女子のペドスで進むハ
 島さんには、さぞじれたかたでしやう。
 途中、富士が見える。いつ見ても、富士は
 富士らしい。ゴッ坂。去年の幕當地。冷た
 い風が気持ちよい。途中、奥多摩小屋で水を
 補充して頂上へ向かう。出会う人も多く
 なった。頂上。やっとな昼食である。チー
 リンゴ、ソーセイジ。リンゴの丸かじり。
 冷たいジュース。展望も360度。印象的だ。
 たのは、やっぱ富士山。予定を二十五分
 もオーバーしてはいよいよ下り。下りは下
 一方。一気にかけ下る。途中、人をドンク
 追い越す。ムキになつて下る。二時間で、鴨
 案内所着。ここでキスリングをしよう。鴨
 沢へ下る。鴨沢ではバスを待つこと二十

分。全員、無事のりこむ。やがて水川の町の光が見えてきた。(藤田記)

★水川の鴨沢間のバスで荷物代を五十円もふんだくられたのには、オドロイタ。

参加者

藤田 入戸野 山田 東郷 依田
 吉沢 さん。特別参加 佐久間 岩崎 上遠野
 八島さん。

7:25 立川 7:42
 水川 9:00
 境 9:15
 柳屋 大蔵 10:15
 12:30 雑木屋 1:45
 2:05 頂上 2:20
 4:15 大外 4:25
 造林屋 4:45
 泉源荘 6:58
 7:15 氷川 7:23
 8:40 立川



ぬ

追い越す。ムキになつて下る。二田君、鴨
案内所着。ここできスリノグをしよう。鴨
沢へと下る。鴨沢ではバスを待つこと二十

二月山行（御前山）

今年度最後の山行のためか予定より大
分早く全員集合。立川、水川、バスで境下
車。天気の良い朝の冷気の中を、皆元氣
で歩いてゆく。OBは男性一人で少々心
細そう。道が凍つていて油断すると、すぐ
すべる。ノロノロと歩いて、避難小屋との
分岐へきた。雪が降つてきた。目の前の雪
景色はクリスマスを思わせる落ちつきを見
せている。久しく雪を見ていなかったため
か、何となく皆も静かになる。木の枝に細
かく積つた雪が繊細な美しさをかもしだす
黄・赤・青のキルティングが雪の白さにく
つきりと映る。かわいいた使の行列だ。
十一時過ぎているのにまだ小屋につかな
い。お腹がすいた。セツと小屋に着くと、
先着がいてそれぞれラーメン、紅茶、スキ
ヤキを囲んでいる。私達も紅茶を飲む。非
常においしい。外は吹雪になつていて。
小屋を出ると、天気が回復、快静となる。
皆の気持も雪と天気にイカれてロマンチッ
クムード。細い木の間から見える、平野や
木だらな山、空、湖が心を引く。
頂上で記念写真をとる。上りの足の不安定から皆の

心配していた通り、道は固い氷が張つていて
坂でスケートをしていような気分。一年生
はよくころぶ。ころぶたびに悲鳴を上げる。
水の上といわず、砂の上といわずおしりです
べつて行く人もいる。重力に身を任せ、奇声
をあげながら突進されるといささか後ろが心
配になる。道は歩けないので、道なき道を木
や石に抱きついたり、Yさんの発明したゴリ
ラスタイルで歩いたり、人間とも思われな
面々である。そのうちに痛さと、神経の疲労
と道がうらめしくなる。よくころぶ。一年生は
道に向つて怒つてはいる。
だんだん道がせまり、道らしくない道を
歩いていけると、途中全く切断された。OB、OG
が先に歩く。周囲は急に日が暮れる。
くずれ易い斜面から落石がガラガラ落ちてく
る。一年生は下で待つていて。下がよく見え
ない。一年の逃げまどう姿が目の前にちりつ
く。私は安全地帯にいて。二年だという意識
と自分自身は安全だという意識が交互して表
現しがたい心境になる。一年が登つてきて一
に難所を渡る。足の置き場はぽつとでた石
の能と、紅い草木のみで地質は砂のよう。心
もとない。紅い草の暗いので自分も必死で登
この時初めて二年生を意識した。もうだ一年に

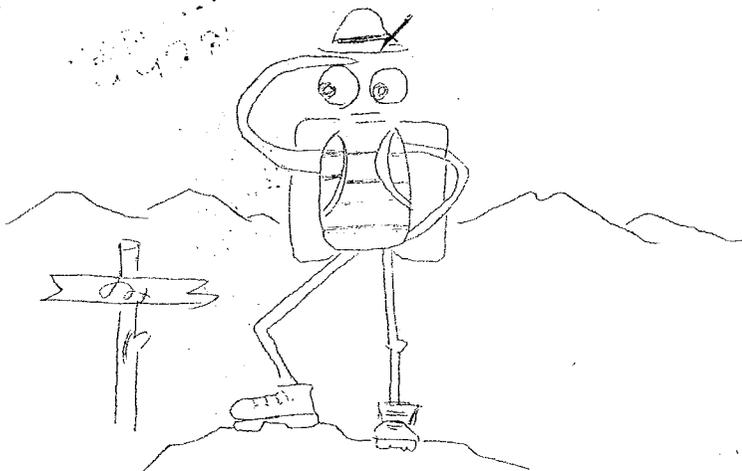


	コース	タイム
7:25	立川	4:42
9:00	氷川	
9:15	境	
9:55	休	10:10
10:15	柳野の大滝	
11:30	休	11:35
12:30	遊難小屋	1:45
2:05	頂上	2:20
4:15	大ダブ	4:25
4:45	造林小屋	
6:50	思源荘	
7:15	氷川	7:23
8:40	立川	

足を踏みはずしたりして、恐れを与えてはな
らないのと緊張していた。一年の方がかえ
って落ちついていたのかもれない。斜面を
登って広い道路に出た。ここからペースを速
くする。一年生は初めての経験の疲労で遅れ
きめでフラフラしている。周囲の山が真黒に
おおいがぶざり、月が明るく一団を照らす。
星も見えてきた。凍ったコンクリートの道を
早速で歩く。雪がキラキラ降ってきた。
帰りの電車の中で、すいていたせいもあり
ホツとして食べではしゃべりなとして夜八時
半頃立川に着く。
皆それをして意義のある楽しい山行だった。
山の昼と夜、雪と青空、様々な印象をもたら
した変化ある山行だった。
(入戸野記)

参加者

二年一 藤田 (CL)
二年一 依田 (SL)
二年一 東郷
二年一 佐久間
二年一 上遠野
二年一 山田



月日

取りに戻る。さて新宿駅へ急ぐ。ミラー

7:25
 7:00
 7:15
 7:55
 10:15
 11:30
 12:30
 2:00
 4:10
 4:40
 6:50
 7:15
 8:40

南アルプス 個人山行

1967年8月11日

古西 水口 荒木 渡辺 山本 早瀬

我々が「今年も南アルプスへ行こう」と
 いう考えを固めたのは、「夏山の計画」と
 ぼぼ時を同じくして、四二年度の初頭だ
 たと思ふ。ゴースの検討は合宿の計画と並
 行して行ない、論議の末「南都全山縦走」
 という野望が勝った。三伏峠から入り、塩
 見岳往復などの案も出たが、日教その他の
 関係で、転付峠―赤石岳―光岳―寸又峽と
 いうコースに落着いたのだった。好天で
 の夏山合宿も終えた。八月初旬、メンバ
 も決まり、暑い中で準備を始めた。天候の
 安定な上旬のうちに、出たか。たが、女子の
 下山後の十一日出発になる。前日野寄氏の
 有益な話―ヤマヒル、ヒモヒル―を聞き、新
 宿で朝六時十五分の列車で出発の段とな
 った。
 八月十一日 晴 へい入山
 早朝、勇んで家を出る。がベルトを忘れ

取りに戻る。さて新宿駅へ急ぐ。天気もい
 いまうだ。だが山手線が例の鈍行が出て行く
 その時、下の中央線を例の鈍行が古西が残って
 はないか。ああ無情！ 駅には古西が残って
 いてくれた。すぐ満員の急行「オパール」が
 追いかける。無論見送りなし。とにかく甲
 府で全員集合した。駅で団体の昼食をとり
 身延線で身延へ行く。ここから新倉までバス
 だが、石かな着かなりの一眠りする。降
 りて車道を少し歩くと、南アの八山試験とも
 言われる吊橋に出る。幅三十七センチの板を
 ひやひやしながら渡って、十四時五分、板を
 原の幕営地着。いろのはもうろん我々だけ
 ある。バーベキューとサラダで一回の夕食
 を飾ってかぐ、ニコラアに入ったが、下では
 暑くて寝苦しかった。
 八月十二日 晴 へい転付越え二軒
 五時、転付峠まで出て、水口をトッ
 に川原の道を遊んで行く。今回の装備は、一
 人三三kg程度に押えることのできたが、夏山
 以来なまっただけの体には、ガツクがくい込む。最
 初の休憩では、とうとうラツクも、最
 でとまった。しばらくして、電所裏手の分岐
 へ出ると、指原が川から離れた左手を示し
 ていた。八丁峠の旧道が復活されたらしい。
 ここです早くも一時間の急登をしいられた。

峠を乗越して、再び川原へ出たが、依然として水量は多くアプロの長さを改めて感じる。昼食後再び尾根に取り付き、ジグザグ登ること一時間、ワマガサの中に転付峠が現れた。ここで二度目の昼食をとって、大井川の源流へ五百メートルの急降下である。二軒小屋に着くと早くもハビとトカゲの格闘場面に出くわした。

八月十三日 晴後曇 (一軒小屋)

今日は千枚岳まで、一気に千五百メートルの高度をかせぐ。南ア屈指の急登である。吊橋を渡って尾根に取り付くと、しよつはなから撤しい登りだが、それほとバテを感じななかつた。一ピツ千目三十分 昨日以来どらも休みごととに座るくせがかったようた。樹林の中の単調な登りが続く。目やす最初のピーク、マニホー沢の頭はまだ見えない。思ったより長いので昼食を二度に分け半分を食ラ。だいぶ傾斜もゆるくなつて、前方の樹の間にハイマツに覆われた峰が現れた。あれがマニホー沢らしいか分過ぎてメシにしようしと心得て行ったのはいいが、それグしいものに着かず二昼食とする。変に思つて地面と照らすと、それが目やす次のピーク千枚岳だとわかつた。この辺の地形図は本当に不正確である。このころか

小雨が降り出したが、元氣を得て出発。千枚がしの上部をトラバース気味に通過して森林限界に出たころは、すっかりがスツてしまつた。ダケカンバの下で一休みして、一しきり登ると千枚小屋の分岐に出る。そのまま小屋の方へ行き、その上方百メートル余りの、高山植物の薜荔の中にテント一張分のスペースを見つけた。格好の幕営地である。

八月十四日 霧後晴 (一軒小屋)

朝から強風と雨がテントにたたきつけている。今日は百間洞まで足を延ばす予定だったが、停滞にして様子を見よう。十時頃、風雨が吹きまくつていりる。ガスの中で記念撮影してはいよいよ山行中最高峰の悪天岳へ向かう。小ピークの続く鋭い岩稜を行き、途中多少の悪場もあつたが、一時間程で岩がゴツゴツの悪天岳に到着。依然として視界ゼロである。ここが高さ三、四六mほど信じられない。予定通りカルピスを飲んで荒川中岳に向け出発。中岳を素通りしたが、寒くて休む気にもなれない。前岳とのコルで稜線を離れ、荒川小屋目ざして下つて行くと、みるみるガスが切れ、青空が出て来た。この先水がないので荒川小屋で幕営とする。こんなに人が多いのはこ

こだけだった。眼前の小赤石の夕照が窓に消えてかす、シユラフに入つた。

る。この百間平で昼食をとつていると、再び

ニピツ千でセニジが原の草原に到着。ハイ

最近感じた事

古西 和夫

この一年間を振り返つて来て、私には残念な事、心残りな事があります。それは部の活動に何か萎縮したところがあったといふ事です。私には全力を尽した後の満足感がなりのです。これは學校等を意識したためだけに生じた事だと思ひます。そして我々の奥カや現状を考へるとそれまたしやうがない事だと思ひます。我々の部は言つてもなく運動部です。しかし我々には運動部としてかけている点があるのではないでしやうか。

運動部の活動は、精神的及び体力的な進歩、進歩を目的としてゐることはもう論じずか、もう一つ大きな目的があります。それは「技術的進歩」といふ事です。そして一般の運動へここではスポーツと言つた方が適切かも知れませんが、ではこの「技術的進歩」といふ目的がもつと、人を引きつけるのではないでしやうか。少し陳腐な例ですが、「走り高跳び」や「棒高跳び」を思ひ起して見ました。ある高さのバーを飛ぶ越す事に成功した選手はもはや同じ高さ

にもどまる事は許されません。彼は少しでも高いバーを飛ぶ努力をしつづけました。つまりこの努力をしないかぎり「走り高跳び」も「棒高跳び」も単なる遊びであり、またこの努力のうちにスポーツの魅力もあるわけです。この努力とはもう「技術的進歩」の追求です。さて以上の事を登山にもあてはめて見ましよう。すると当然、次の様な反論が起るかとでしやう。すなわち「登山は他のスポーツとは異質のものであり、スポーツ一般の特長特に「技術的進歩」の追求はそのままで、登山には適用できない。そして無理に適用しようとするところには直接困難に結びつく重大な危険が生かまひ。私はこの意見に反対してはしません。当然だと思ひます。しかしまた「技術的進歩」の追求というのを考へないスポーツは有りえない事も確かかです。

それでは我々の部について考へて見ましよう。がその前に我々は次の事を忘れてはけません。一つは我々の場合「技術的進歩」よりも精神的及び体力的な進歩を重んずべきだといふ事です。これは登山を目的とする一般の山岳会と異なり、登山を何かをうるための一つの手段とする我々の立場上当然なことです。もう一つは「技術的進歩」ということを高く掲げるとは三年間という期間はあまりに短かく、

無題

在問 直樹

なぜ山なんかに来るまでたんだらう。
 重い荷が肩に食い込む痛さに耐えながら、
 急坂をあえぎあえぎ登る時、ふと心な事を
 が脳裡をかすめる。しかも前の人間とほん
 の少しでも離れたかと思うと、先輩のツツ
 け〜〜の声が飛んでくる。
 僕の前を大きなキスリングが並んで進ん
 で行く。必死について行く。それだけだ。
 孤独だ。僕以外にあるのはキスリングの行
 進だけ。自然への挑戦ではない。自己への
 挑戦だ。勝ちたい。何とかして。いや勝た
 ねばならないのだ。
 今、この一年を顧みると、自己に勝つ為
 に何をしたらうかという思いが湧いてく
 る。その前の一年——僕のいた中学校では
 高枚入試を誇大視する雰囲気があったので
 それに巻き込まれ無意味な日々を過ごした
 ことに比べると、ワンゲルに入り、活動
 したことで僕自身を正視する姿勢ができた
 と思ふ。その点ではクラブの良さをしめし
 めてくれたが、さてワンゲルで何をしたらか
 と振り返ってみると、思い深かぶれば疑問は

かりである。僕は山の二となど何も知らない
 のに、そのくせ高い山ばかり追い求める。こ
 の夏は南アへ行こうなんて誘いかける。それ
 に山へ行っただけの地味に赤い線を書き込む事
 よつて自己満足の境地へ浸る。一体僕は何の
 為に山へ行っただけの地味に赤い線を書き込む
 としてこれかたもわかたぬまま山へ行くと
 だらう。けれども山へ行つていればそのうら
 疑向を解決する糸口でも見つかるだらう。だ
 か山へ行こう。二んを強引な理論を考へ出
 して見た。さて、夏山の計画でも立てようか
 な。

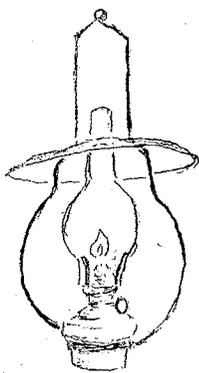
過去一年間の想い出

藤田 明子

- 。 入部 バレー部に對する恐怖心よりワンゲル入部。おぼれる者はワラをもつかむ。
- 。 六月 川の音でねむれぬまま鷹ノ巣山。こころを苦しむ部とは、知つたんだ。
- 。 かしズルズルと泥沼へひっはりこまれて

- 。行く。
- 。夏山。お花畑で大疾走。危うくこの世に
もどまらなかつた。クレオソートと〇〇
〇〇の中毒にかかると。
- 。十月。ブナ坂のテントは水びたし。立つ
て食事のハンをとる。
- 。十一月。牙も凍る雪岩。一年二人でかい
がりしく働く。
- 。スキー合宿。二日の停滞。食糧不足で苦
しむ。
- 。二月。頂上の多少の雪で雪合戦。思いが
けず星野さんの玉を顔面にくぐつ
て只マビツクリ。
- 。春スキー。黒菱小屋のスキー置場で皆に
同情の目で見守られつつわびしく
三人で食事の仕度。技術向上全く
なし。
- 。四月。必死の努力で五人確保。去年の自
分を思い出し、ウナを仕かけたお
たいを複雑な気持ちで。
- 。四月(個人)。カイドブツクの読みすぎ。迷
い迷ってよじ登り、喜仁さんと早
瀬君の声が「天の声」の如く響く。
一年つれて初めめの山行。途中雨
と迷ってサンガン。
- 。五月。長い長い道を何も考えずに歩く。
- 。六月。長い長い道を何も考えずに歩く。

- 。夏山。誰がこのコースを選んだか……？
選んだオマエがうらめしい。
天気も体調も好調。飲んだ葉はクレ
オソート二粒!!
- 。九月。初めめの経験。一かたすまでめがさ
しい。けど期待したほどぬれた人は
いなかつた。
- 。十一月。めがまし時計に頼ったアタシが悪
かつた。ヤルが鳩分かに起床遅刻。
。スキー合宿。異様な嗅いの中の五日間。一
年の不参加が残念!!
- 。二月。すっつてころんで、迷って登って、
暗くて疲れて腹へって……
- 。春スキー。女子スキー合宿大いに乱れる。



風をあげ、冷たい雨にうたれでみじめにふるる。

。六月 長い長い道を何も考えずに歩く。

雑感

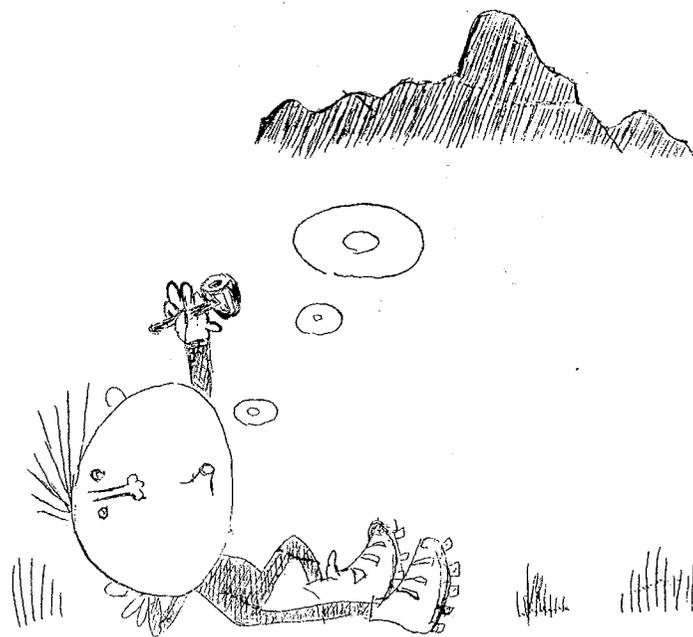
目録 民権

高尾山、景信山、奥多摩、丹次、道志、
 蔵王、盤梯、谷川、ハケ岳、南アル
 プス、北アルプス、富士山と、ずり分登ッ
 たはずだと思フけれど、なにもまだ狭い
 日本、そのまた一部でしかない。北海道
 近畿、中国、四国、九州の山にはまッた
 手を触れていないし、奥東、中部にしてか
 分が、足跡を印した山頂を教えてもた
 かが、知れてる。季節を変え、微ト分
 えるだけ、気の遠くなるほど微ト分
 なッてしまふ。日本は狭い狭いと言わ
 ぞれども山は広大なものだと思わな
 にはいかな。それだけ山登りの楽し
 広く大きく、盡きることもなく見出し
 けるのだらう。あの山、この山と思
 てみると、四季、それ、深々、断片
 的に、春、夏、秋、冬、味、わ、く、ま、く、
 暖か、雨、が、あ、が、つ、て、し、つ、と、り、し、た、大、気、
 緑、は、芽、を、爪、か、が、ず、の、ど、か、に、鳴、く、ラ、グ、イ、ス、ま、だ、
 す、ま、の、原、茅、戸、許、に、雪、が、残、っ、て、り、て、嘆

声、あ、げ、冷、い、雨、に、う、た、れ、で、み、し、め、に、あ、る、え、
 夏、ど、こ、ま、で、も、澄、み、き、つ、て、い、く、朝、あ、る、い、
 は、蒸、き、や、あ、る、山、は、乾、さ、れ、苦、し、み、延、々、と、続、
 く、屋、々、と、あ、る、山、は、解、放、感、に、し、み、い、み、と、満、足、す、
 ま、夕、暮、れ、と、睡、気、が、相、合、の、快、調、さ、約、束、し、て、く、
 れ、夕、暮、れ、の、感、触、を、知、る、沢、々、ハ、ー、ケン、が、歌、り、
 感、か、ら、岩、の、感、触、を、知、る、沢、々、ハ、ー、ケン、が、歌、り、
 ザ、イル、が、あ、る、紅、い、山、脈、新、鮮、さ、を、汗、
 井、水、に、あ、る、あ、る、空、気、肌、を、刺、す、冷、い、雨、汗、
 を、ひ、か、し、筋、肉、を、いた、ぶ、る、悪、魔、の、風、アル、プ、
 ス、は、初、化、粧、谷、川、岳、は、ホ、ン、ネ、ツ、ト、を、冠、る、
 冬、あ、の、夏、の、お、花、畑、は、人、跡、未、踏、の、極、地、と、変、
 征、服、巨、大、な、威、文、高、に、舞、い、狂、う、テ、ン、ト、が、は、
 下、め、き、ラ、ジ、ウ、ス、は、快、調、に、ラ、ナ、リ、ホ、ツ、ク、
 ン、が、威、勢、よ、く、は、い、け、歌、笑、い、シ、ヤ、ン、ケ、
 雪、輝、エ、ビ、の、シ、ツ、ホ、ラ、フ、セル、に、次、ぐ、ラ、ツ、バ、
 ル、ワ、カ、ン、が、バ、ン、ツ、を、揺、り、つ、つ、アイ、ゼ、ン、が、堅、雪、
 が、散、ら、した、氷、片、の、き、ら、め、き、イ、ゼ、ン、が、堅、雪、
 に、き、ら、め、き、雪、は、夜、と、思、え、仇、と、思、え、栄、
 光、の、記、録、も、あ、り、敗、北、の、嘲、笑、と、も、な、る、
 い、は、何、も、求、め、て、は、い、ない、の、か、一、人、で、あ、る、
 い、は、何、も、求、め、て、は、い、ない、の、か、一、人、で、あ、る、

いは学校の遠足のようになくさんで、陽の
 ぶりそそぐ低山を歩くのは楽しい。雨に濡
 れ、風に吹かれて、友とはげまし合いながら
 辛い山を過せば、その友情はこよなく貴く
 残る。ガイルに結ばれて目のくぐむような
 岩壁を攀いでいる時、血は高鳴り、心は洗われ
 いく。冬の高山は総決算だ。力の限りを、
 技倆のありたけを、精神の底までを盡して
 しまふ。刻一刻、なすべき事はなくさんあ
 り、考えるべき事は無限にある。絶えず考
 え、絶えず為し、絶えず消盡し、絶えず充
 溢する。戦いつづけ、死につづけ、生まれ
 つづける。それは戦いであり、絶えずやる戦
 いであり、決して敗けてはなすなない戦いで
 あるが、征服すること、正しく行なうことだけ
 が勝つことである。正しく行なうことだけ
 の敗北が永遠の敗北であり、たかた絶えず
 勝ちつづけていなければならぬ戦いであ
 る。それは人固との信頼による自然に対す
 る戦いであり、自然の庇護の下におこなう
 人間との戦いである。切れ、結び、又切れ
 る。普段は弱い人々との紐帯をまつた
 新たに創造するための戦いであり、意欲と
 理性と筋肉の協同能力をやりやりまで出し
 つめ、強く頭を強化する戦いである。自然へ

の反逆が、自然との合一であるようなら、それ
 は母なる大地への回帰であり、天なる理想へ
 の飛翔である。そこでは行為のみが目的を正
 当化した。関係を生みだし、言葉を創造する。
 そうした純粋な行為の世界をほくは追い求め
 ているのだらうか？



つめ、強く顕在化する戦いである。自然へ

部員名簿 (83.5.1現在)

△顧問▽

尾形 良助 調布市深大寺町一三九〇

小林 隆一 〃 永福町七四

中沢 ナミ子 調布市小島町四三〇

中村 道雄 渋谷区鶯谷町二九〇(うぐいす住宅)
五二〇三 (四五二)二八四六

草野 和郎 三才市下連雀二〇七

(〇四二二)(四五〇)〇六八

△二期卒業▽

石榑 康利 杉並区本天沼二一四七ト三
(三九九)〇六七八

永井 祥一 〃 〃 三才四一ト二
(三九九)三三一八

中尾 成邦 〃 〃 永福町三〇四
(三二八)五六四二

早瀬 久起 〃 〃 松庵北町一三九
(三九二)五〇一六

八島 久男 〃 〃 久我山三二〇三
(三九二)六三八四

山本 象 杉並区善福寺一ト七ト一九
(三九九)八六四一

稲葉 美子 〃 上高井戸三ト八八五
(三九九)二六〇三

岩井 祥子 武蔵野市緑町二ト四一ト三〇五

三枝 みのり 中野区松ヶ丘一ト一ト一五
(三八九)〇九七一

中井 早苗 杉並区下高井戸一ト六四
(三二二)七二一五

耳柴 春実 〃 〃 和泉町二六八
(三六八)六〇一七

星野 敬子 〃 〃 清水三二二ト一七
(三九九)二七〇二

△三年部員▽

伊東 伸作 北多摩郡久留米町のぼりか(町北)
一六八(三二八)五 (〇四三四六四)六五五

古西 和夫 中野区中野一ト三九ト二
(三六九)〇〇三一

中村 正俊 杉並区成宗二ト八七ト七
(三二一)八六四七

長谷川 誠 〃 〃 下井草三三三ト七
(三九〇)〇〇四七

早瀬 友秋 〃 〃 松庵北町一三九
(三九二)五〇一六

水口 泰介 杉並区阿佐谷北 一三一一一
(三二一) 一七二八

山本 太一 〃 下井草五 一三三三三
(三九〇) 六二八六

渡辺 喜仁 〃 阿佐谷北 五九九一三
(三三七) 二六三五

長島 裕子 国分寺市戸倉四 一〇四九
(〇四三〇) 一〇四九

入戸野 まゆみ 杉並区高円寺南 二一七一五
(三二二) 四九二〇

藤田 明子 三广市井の頭二 一〇二二
(〇四二七) 四三三二

山田 優子 武蔵野市西久保 一三七一四
(〇四二二) 五二二六〇

八二年部員

小口 徳雄 中野区東中野 二一六一一五
(三六〇) 六六七四

木俣 冊 杉並区上高井戸 三一五五五
(三〇二) 八二四九

在間 直樹 三广市牟礼 三广台公団 二五〇四五
(〇四二二) 四五一八二

田口 貞啓 練馬区旭丘 一三三三
(九五三) 二二五四

永井 浩之 杉並区本天沼 三一四一一二
(三九九) 三三一八

宮崎 豊彦 中野区弥生町 六一七一
(三八〇) 五〇〇七

東郷 幸子 練馬区下石神井 一四二〇
(九九七) 二〇九〇

吉沢 美波 杉並区大宮 二九〇〇
井田 和子 武蔵野市吉祥寺東町 二二一七
(〇四三〇) 三三四五四

依田 桂子 川崎市生田 六六五九一
(〇四四) 二五九一

西朋登高会員 名簿 (S. 43) 一現在

八特別会員
都筑 修一 長野県松本市女鳥羽町 四六三

鳥山 榛名 目黒区上目黒 五一二四三五

中村 淳 世田谷区代沢 二二五二二〇
(四二〇) 九九七四

岩井 富士雄 台東区浅草桂町 三二二
(八五〇) 一九〇八

布施 千恵子 千葉県千葉市稲毛町 二一四

篠崎 武 西多摩郡日ノ出村 大久野 一七一三
(五日市) 二九七

安藤 英次 三广市深大寺 三八二丸富士見社宅
二二二

見聖 朝規 兵庫県姫野市竜野町 日飼 三五五
(三九〇) 三二一七

永井 浩之 杉並区本天沼三十四一八
(三九九)三三一八

八普通合員

安藤 英一 三戸市深大寺三八二丸富士見社宅
三二二

林 春彦 江戸川区北小岩五十二八十三

南波 貞敏 国分寺市南野二一〇一二二

長崎 正躬 神奈川縣鎌倉市山崎一〇三三
(〇四六七)二八五一

田中 将利 杉並区西荻北二一〇一三西荻窪
マンション四〇五 (三九六)六四一〇

田中 実 阿佐谷南一三一一八
(三二一)六三八九

平沢 勇 天沼二一〇一二
(三九一)三六一三

笹田 英次 中野区仲町一三

鈴木 輝夫

山口 雄弘 武蔵野市吉祥寺本町二一四一七

佐藤 信治 八王子市本郷二〇
(〇四三九)一一三六六

松田 朝夫 大阪府豊中市本町九一五九花蝶
七二二

町田 明 杉並区下井草四一〇一二〇
(三九〇)三二一七

見聖 朝規 兵庫縣滝野市竜野町日飼三五四

渡辺 享 杉並区天沼三十七三六

目沢 民雄 杉窪二一六〇欽山ビル一〇号
(三九〇)四〇三二

成瀬 泰雄 文京区西片二一八一七

加藤 鈴夫 杉並区永福町四七

鈴木 潤 下高井戸四一九四七
(三二一)二七九一

岩崎 元子 大宮前二一七一
(三九〇)九七五一

桑田 敏子 神奈川縣横浜市戸塚区三ツ橋町
四七五 (〇四五)五三三六

稲田 弘美 埼玉縣朝霞市藤岡四二二
(〇四八七)二六〇五

岩波 康之 葛飾区小谷野町三〇三

米野 弘躬 豊島区池袋二一六九二本郷方

小田 尚 神奈川縣横浜市戸塚区笠間町
一三二四

飯塚 康史 6 立川市砂川町三四一二けやき台団地
二九一三〇四 (〇四二五)(二〇八六六

林 武志 6 武蔵野市吉祥寺東町一〇二一七
(〇四二二)(三)五四七五

川口 和雄 6 神奈川県川崎市百合ヶ丘一九一七
(〇四四)(九六)〇一六二

松田 総 9

黒沢 隆 10 神奈川県藤沢市大鋸藤沢団地
三八一三〇二

橋本 鋼太郎 11 練馬区立野町九〇九
(九三〇)西四三四

今井 義治 11 世田ヶ谷区豪徳寺一四二一四
(三八五)二二七

田中 康弘 11 中野区大和町三一三三一
(三八二)〇六三六

沢野 徹 11 宮園通り五一七
(〇四二)(四四)七七七四

関谷 興雄 11 武蔵野市境南町一〇二一五
(三九八)〇〇一三

小川 建吾 12 杉並区上高井戸三一八五七
(九九〇)七六五八

梶内 俊夫 12 中野区上鷺宮一〇九一七
(三九二)一八二二

川田 秀明 12 杉並区上高井戸五一二一九七
(三九二)一八二二

三浦 潤 13 杉並区高円寺北一〇一三二
(三八六)〇八三三

山野 裕 19 世田ヶ谷区祖師谷二一三六

橋本 章 12

野原 光 13 神奈川県川崎市宮崎字新鷺沼
一五四〇

板垣 乙未生 14 杉並区井荻二一六〇
(三九〇)六三九四

山本 省治 14 高円寺南四一四六一
(三一)二四三九

小津 亮介 14 千葉県船橋市大穴町六六五

福田 善明 14 杉並区永福町二六
(三二〇)七二三四

平木 桂八 15 荻窪二一九六
(三九)二八九七

上遠野 靖 17 今川二一四一六
(三九九)四〇九七

三浦 篤 17 中野区新井一〇二八一四
(三八六)二〇五四

梅原 伸二 17 杉並区西荻窪二一〇七
(三九〇)〇三六三

宮武 義照 18 練馬区練馬三一七七一
(九九一)四二七九

尾崎 純理 18 練馬区練馬三一七七一
(九九一)四二七九

滝口 道生 18 目黒区自由丘三一三二二
(七八)一五七六

(三九三) 一八二二

(七八) 一五七六

三浦 潤 杉並区高円寺北 一〇〇二二

(三八六) 〇八三三

山野 裕 世田ヶ谷区祖師谷 二一三六

(四八三) 二七六一

伊藤 義和 武蔵野市吉祥南町 五〇八一

(〇四三) 四三九〇七三

平野 誠 杉並区天沼 一八二八七

(三九二) 四六六四

編集後記

。四月の初めにできる予定だったのが一月までと遅れてしまつた。

思えば、感想を考へ始めたりは去年の末。要するにほぼ半年かかつたわけだが、その割には情けなくなるような気がする。

予算の関係で自分達で原紙を切ろうなどと言つたのが間違いのもと。

相棒の渡辺の顔を見ると「彷徨の文字が三分を浮かんできて半年間だった。

。今度の彷徨では、都の歴史をまとめよう、と言ふことになり、多忙なOBの方々に原稿をお願いしたまでは良かったが、いざ編集しようといふ段になると一同その内容の膨大さに驚いてしまつた。結局、一回一冊をまとめることは我々の手に余るので別の機会に都史だけをまとめることになつた。

それにしても二十余年間という特色々な事があるものである。

発行 一九六八年五月一三日

発行所 東京都杉並区大宮前三丁目113

東京都立西高等学校

ワンダーフォーゲル部

編集責任者 古西和夫